

第2章 14世紀から17世紀における 九州出土ベトナム陶磁の分析

～年代比定・分布及びその歴史的背景～

西野 範子

1. はじめに 文化交渉学としての陶磁器研究

腐って土に返ることのない陶磁器は、流通や交易を語る良好な資料として考古学者や歴史学者が好んで使用してきた。陶磁器を扱う上で何よりも重要なことは基礎研究の正確さであり、生産地や年代の詳細な研究があつて初めて正確に歴史を語り得る資料となりえる。

出土陶磁器は、「生産——流通——使用——廃棄」という過程を経て、最終的には全て廃棄された状態で出土する。製作が失敗して生産地で破棄されたもの、地元で消費され割れて廃棄されたもの、海外まで運ばれて使用されたもの、使用期間が長く数百年伝世されたものなど、使用期間や運搬距離は陶磁器によって様々である。すでに廃棄された陶磁器が建築基礎に再利用されることもある。どのような経緯を経て、各々の陶磁器がある地点において出土したのか、生産から廃棄までの道のりを復元しながら理解することが望ましい。分析者の焦点の当て方によって、陶磁器は、生活史、交易史、技術史、各国間の関係史など様々なことが理解できる材料となる。

さて、この論文では、年代比定にこだわりながら、九州出土のベトナム陶磁に焦点を当てて時期別の出土分布図を作成し、そこから流通や時代的背景を捉えてみたい。本紀要では、中山圭、橋口亘各氏が、それぞれベトナム陶磁を扱っており、天草、坊津という地域において、海外各地から運ばれた陶磁器を分析している。一地域から、海外との繋がりを分析するという方法である¹⁾。

海外で受容されたベトナム陶磁と、ベトナムで生産、使用されたベトナム陶磁とは以下の点で異なる。海外で需要された陶磁器は、ある時期に交易者が選んで運んだ断片的なものであるのに対し、ベトナムの出土例では、過去から現在までベトナム国内で生産された陶磁器の技術的な繋がりが確認できるという点である。

よって筆者らは、ベトナム国内の遺跡における発掘調査や表採調査から、ベトナム陶磁の分類を行い、

1) 今までも、日本出土のベトナム陶磁研究においては、森本朝子氏をはじめとし、各都道府県で研究が既に成されてきた。それらの研究成果は、1991年『貿易陶磁研究』11号、1993年『上智アジア学』11号、2004年『陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア陶磁器産——』、吉田泰子・阿部百合子（2010）「日本出土ベトナム陶磁の概要」等に納められている。

その型式学的変遷と、出土層序、年代の明らかな各地の資料を基準にして、10世紀から20世紀までのベトナム陶磁編年案を作成し（西村・西野2005）、さらに、西野（2011b）により詳細な分析を提出した。それらは日本国内で捉えられている年代観と大幅には異にしないが、従来、ほぼ1世紀単位で年代観が示されていたものが、1世紀を2から4分期することを可能とした。

九州出土のベトナム陶磁に関しては、すでに東南アジア考古学会（2004）で、各都道府県の研究者が出土状況や遺跡の歴史的背景を提示している。しかし年代観に関しては、各々の研究者が個別に年代を与えているため、この論文において、西村・西野分類を年代比定の根拠として、九州出土のベトナム陶磁の年代観を提示し、各時期別の九州地区におけるベトナム陶磁分布図を提示したい。

2. 九州出土のベトナム陶磁を分類するにあたって

九州で出土するベトナム陶磁年代比定にあたり、西村・西野（2005）の分類と編年案に基づく年代観を提示する。当論文は製作技術の差異から体系的に分類を行い、各分類の年代比定までの根拠を明らかにしている。以下に、西村・西野（2005）分類の概要を記しておく。

西村・西野（2005）分類及び編年案の概要

ベトナムにおいて陶磁器が生産されてから現在に至るまでの約2000年間を俯瞰すると、碗皿の窯詰め時に重ね焼く技法が、時代を追って変化するという傾向がある。よって、碗皿に残る痕跡から、碗皿の重ね焼き技法を分類基準の基本とした。

14世紀から17世紀のベトナム陶磁に使用される窯詰め技法の名称とその窯詰め方法について、簡単に説明しておく。

- a. トチン利用：碗と碗の間に、トチンと呼ばれる支焼具を挟んで窯詰めする方法である。トチン利用による窯詰め技法は、トチンの形から、さらに以下のように3種類に分類した。
 - ・断面扁平形輪状トチン：粘土紐の両端をつなげ、押しして扁平状にし、片面からつまみ出して4ケまたは5ケの脚部を作出するトチンを使用する。
 - ・円盤形トチン：粘土塊を平たい円形にし、円錐形の脚部を3ケもしくは4ケつける形能のトチンを使用する。
 - ・断面円形輪状トチン：断面円形状の粘土紐の両端をつなげ、円錐形の足を3ケもしくは4ケつけるトチンを使用する。
- b. 輪状の釉剥ぎ：碗の内面に高台直径と同じ位の幅に輪状に釉剥ぎし、その上に碗を重ねる方法である。
- c. 口縁釉剥ぎ重ね合わせ：口縁部を釉剥ぎして、口縁どうし、高台どうしで重ね合わせていく方法である。

その他、碗皿内に痕跡がないものは、1点ずつ焼成されたか、重ね焼きの最上位に載せられたと考えられる。

重ね焼き技法に大分類した後、高台型式や施釉方法の差異で細分した。碗皿を分類の対象に扱った理

由は、ベトナムで出土する陶磁器の80%から90%が碗皿であり、十分な分類研究が可能なためである（西野2011b）。

3. 九州出土ベトナム陶磁の分類と年代観

九州出土のベトナム碗皿を西村・西野分類枠に従って分類する。碗皿以外の資料に関しては、体系的な分類が完成しておらず、文様や器形認識に基づく年代観を示すのみとする。また、断面扁平形輪状トチンB-2-b及びB-2-c類の枠組みに関しては、新しい認識から、第4項で年代の見直しを行う。

A. 碗皿類の分類

1) 断面扁平形輪状トチンB-2-a類（図1-1, 2）

重ね焼き技法は、断面扁平形トチンを高台接地面下に置いて重ね焼く。高台が非常に低く、高台内が浅く削られるタイプで、接地部はゆるやかに削られる。「B-3-a(土目)類」から繋がる類型である。14世紀中頃に位置づけられる。

長崎県壱岐：芦辺町観城遺跡

2) 断面扁平形輪状トチンB-2-b及びB-2-c類（図2-1～図9）

主に鉄絵菊花碗および青磁碗が含まれる。重ね焼き技法は、断面扁平形トチンを高台接地面下に置く方法である。高台断面逆台形で、高台接地部外側は削られている。B-2-bとB-2-cの違いは、B-2-b類が高台接地部の削りがゆるやかであるのに対し、B-2-cは高台接地部がしっかりと削られるという点である。この類型に、壱岐、対馬、博多、大宰府出土の鉄絵碗、青磁碗のほとんどが含まれる。年代は、14世紀中頃から後半であり、B-2-cのほうが、型式学的には年代が下る。原資料を観察して、高台接地部の削り方を確認できれば、B-2-b類かB-2-c類に分けることが可能であるが、実測図では、なでの部分が削り取られるように描かれることもあるため、今回全ての資料を分類できず、2分類をまとめて記載した。出土地点を以下に記す。

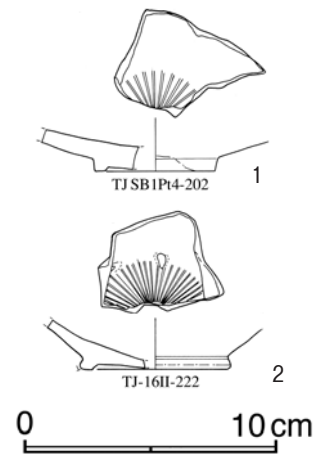


図1 断面扁平形輪状トチンB-2-a類
14世紀中頃 壱岐 観城遺跡
(図1-1,2は大浜奈緒氏による実測)

博多 (図2-1~13) : 博多35次、博多40次、博多42次、博多60次、博多64次、博多71次、博多77次、博多85次、博多87次、博多93次、博多95次、博多120次、博多124次、博多143次、博多144次、博多154次、福岡城43次、築港線2次、築港線5次、樋井川A1次、築港線3次

博多出土

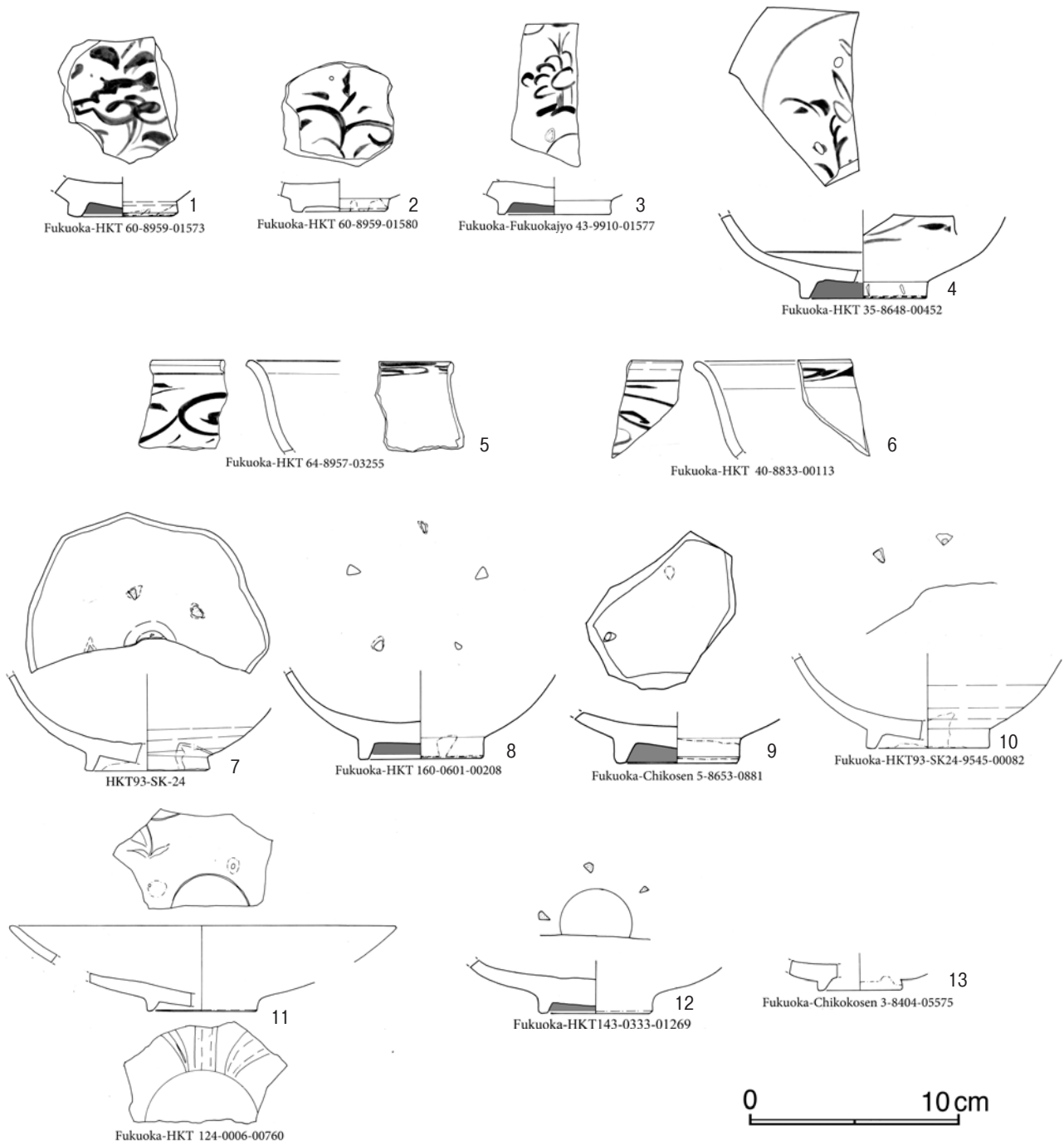


図2 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：博多

(図2-5,6,7は大浜奈緒氏による実測)

大宰府 (図3-1~17) : 金光寺遺跡第67次、条坊遺跡左郭5条7坊、観世音寺東辺部第119次、大宰府金光寺遺跡第97次、観世音寺東辺部第45次、条坊遺跡第71次、観世音寺東南隅部第5次、金光寺遺跡第67次、観世音寺東辺部第117次、観世音寺前面第109・111次、

大宰府出土

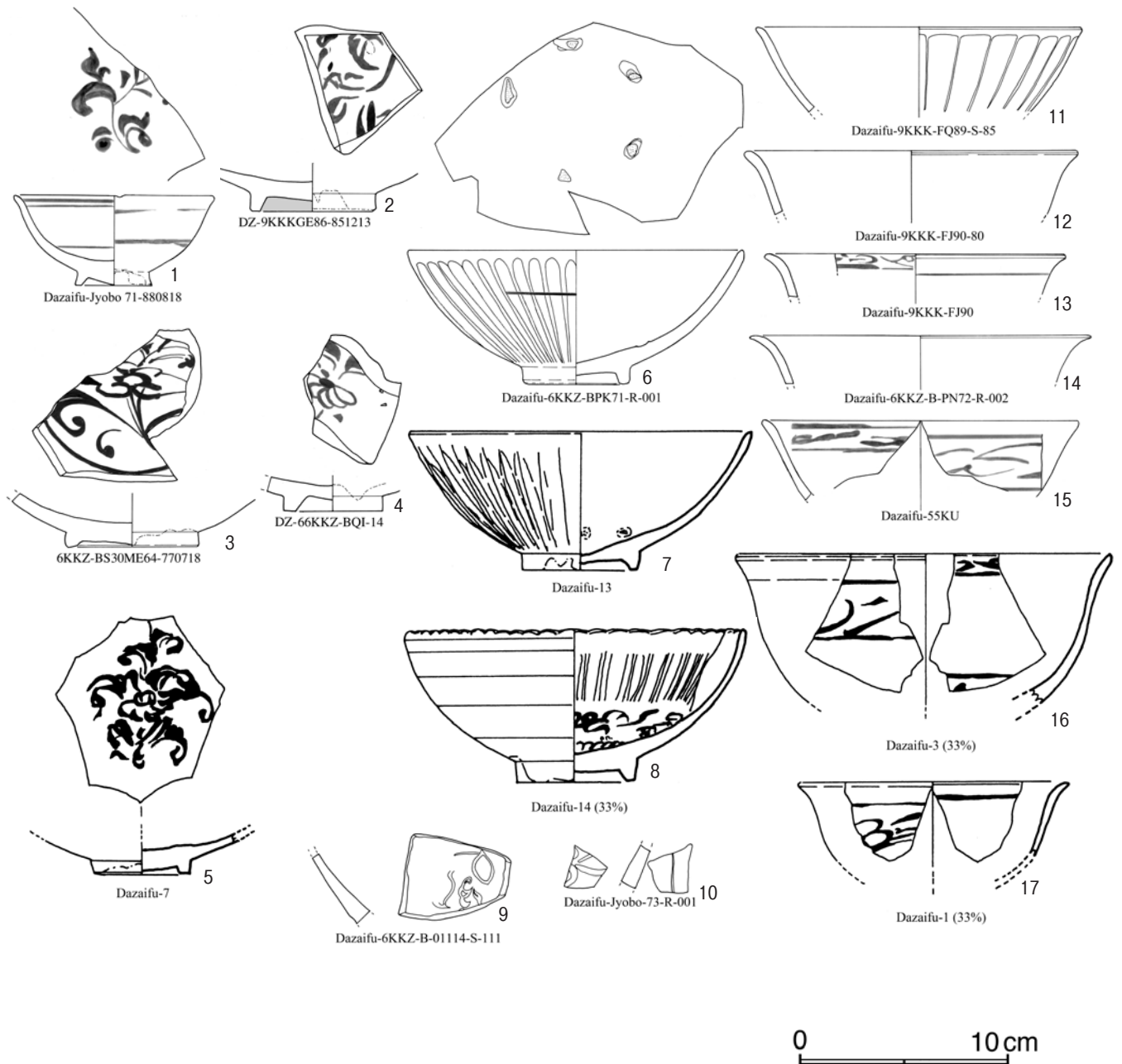


図3 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃~14世紀後半:大宰府
(図3-3,9,11~14は大浜奈緒氏実測、図3-5,7,8,16,17は、横田賢治郎1991より転載)

北九州（図4）：小倉城跡

北九州 小倉城跡

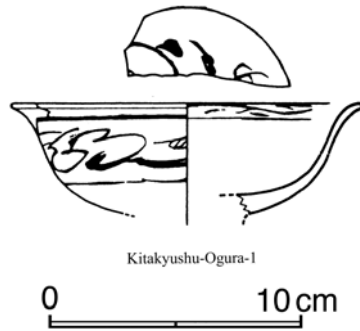
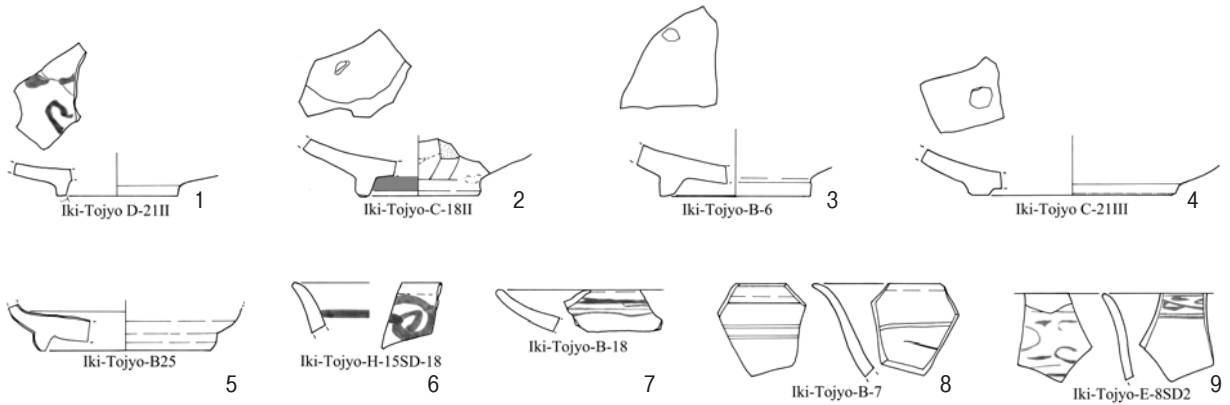


図4 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：北九州
 (図4は、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997より転載)

長崎県壱岐（図5-1～13）：芦辺町観城遺跡、芦辺町湯岳興触遺跡、芦辺町深江鶴亀触安国寺前B遺跡

観城出土



興触遺跡・安国寺前B遺跡

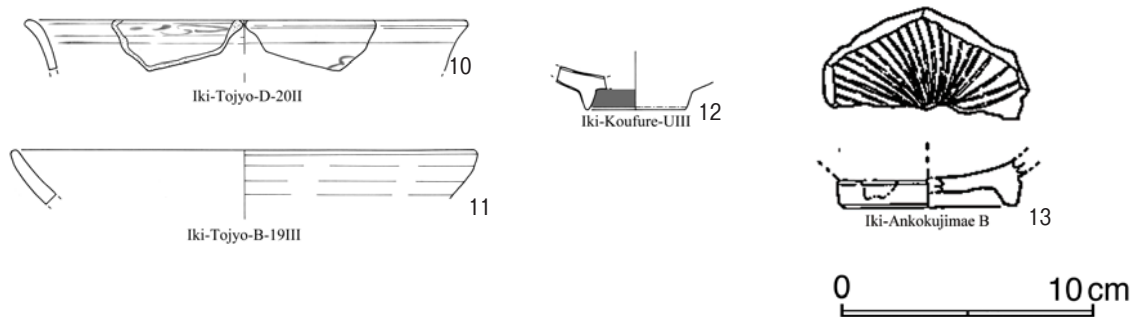
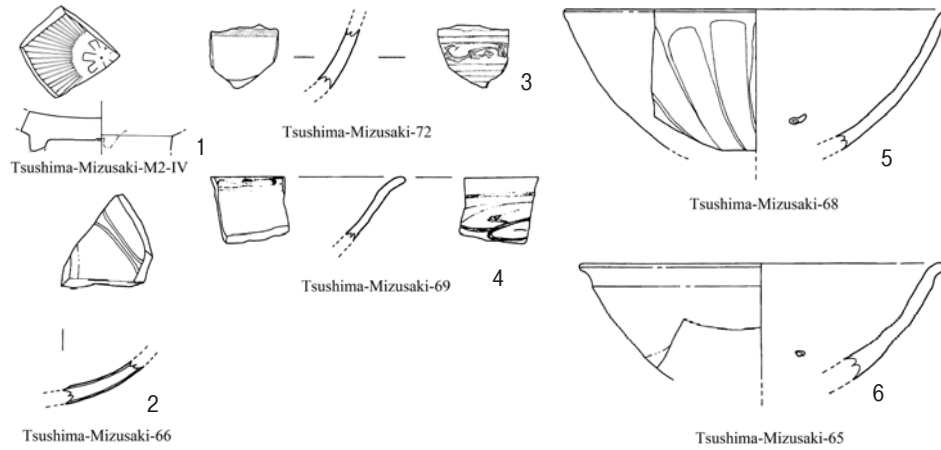


図5 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：壱岐
 (図5-5は大浜奈緒氏による実測、図5-13は、山下英明・川口洋平1997より転載)

長崎県対馬（図6-1～9）：水崎遺跡、水崎（仮宿）遺跡

長崎県平戸和蘭商館跡（口縁部）

水崎遺跡



水崎（仮宿）遺跡

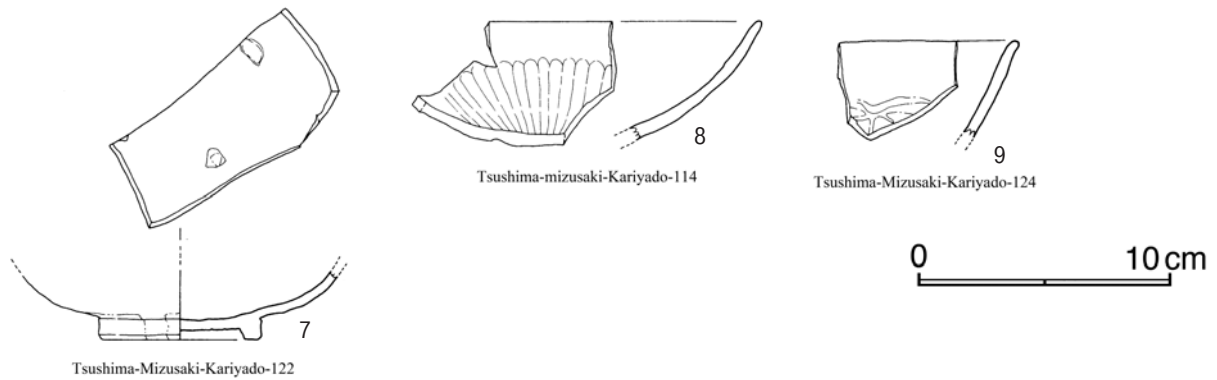


図6 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：対馬

（図6-2～6は長崎県美津島町教育委員会1999、図6-7～9は、長崎県美津島町文化財保護協会2001より転載）

佐賀県伊万里市：河内野遺跡

河内野遺跡

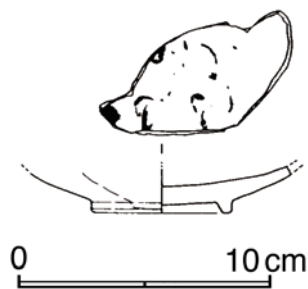


図7 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：伊万里市

（徳永貞紹1998より転載）

鹿児島：坊津町泊海岸（本書の橋口論文21ページ参照）、
菩提遺跡（図8）

鹿児島 菩提遺跡

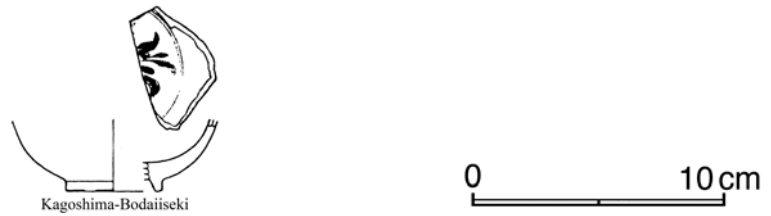


図8 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：鹿児島
(図8は重久淳一 2004より転載)

熊本：棚底城跡（本書の中山論文66ページ fig.5-68参照）、
玉名市隅部文秀氏採集遺物（図9）

玉名市菊池川採集

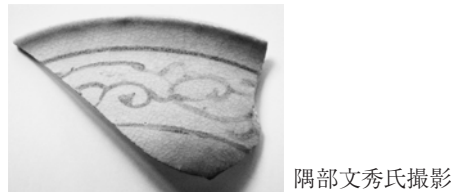


図9 断面扁平形輪状トチンB-2-bおよびB-2-c類 14世紀中頃～14世紀後半：熊本

3) 断面扁平形輪状トチンB-3-a類 (図10-1～3)

高台を低く作出し、高台内を浅く削り込む碗皿類である。この類型には多く目土を使用するが、時期の下るものは、トチンが使用されている。日本出土の高台の低いタイプの碗皿は、トチンが使用されており、14世紀中頃であると考えられる。(14世紀前半に位置づけられる碗皿は内折口縁を持つものが多い。)

博多：博多124次、博多40次、築港線3次 (図10-2は1点焼成もしくは最上部に設置されているが、高台型式は、B-3-c類に相当する。)

対馬：水崎（仮宿）遺跡

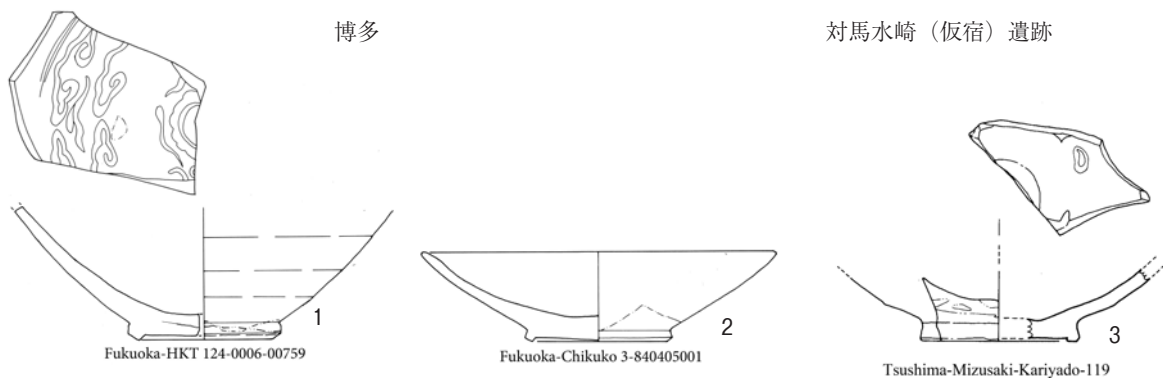


図10 断面扁平形輪状トチンB-3-a類 (後期) 14世紀中頃

4) 断面扁平輪状トチン B-3-c類 (図11-1~3)

高台を低く、高台接地部は平らに作出されている。比較的丁寧に作出されるものが多い。14世紀後半に位置づけられる。

博多：博多114次、博多40次

大分県：中世大友府内町跡

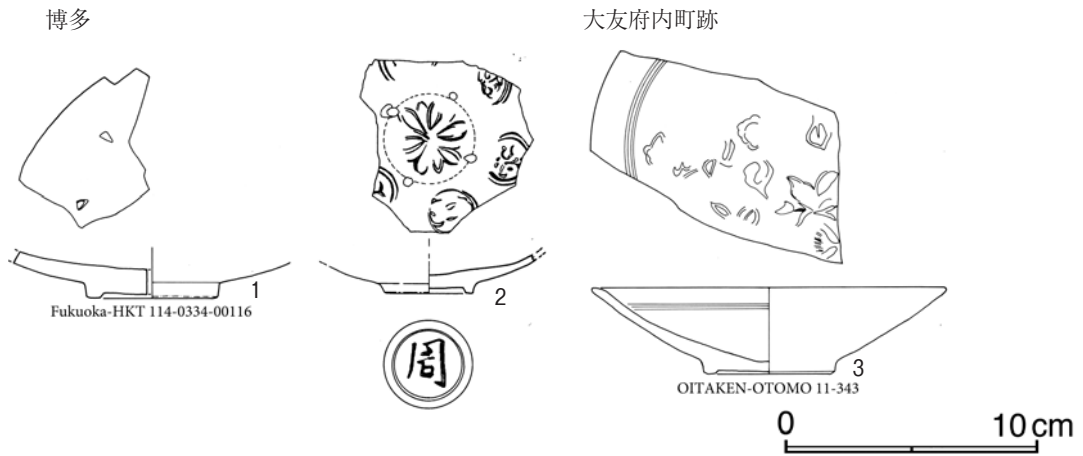


図11 断面扁平輪状トチン B-3-c類 14世紀後半
(図11-2は森本朝子1993より転載)

5) 輪状の釉剥ぎ B-2類 (図12)

内面に輪状の釉剥ぎが深く削られている。高台断面内側が斜めの逆台形に作出され、高台外面下半部が幅広に削られている。施釉範囲は体部までである。ベトナム・タインホア省の胡朝城で出土するタイプであり、15世紀初頭に位置づけられる。

博多：博多35次（劃花文青磁碗）

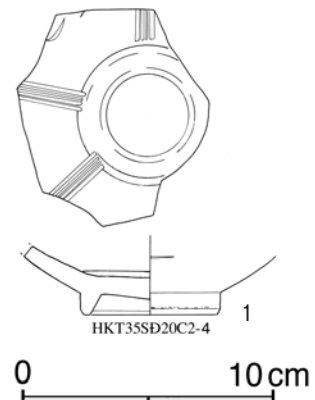


図12 輪状の釉剥ぎ B-2類 15世紀前期

6) 口縁釉剥ぎ重ね合わせ A-2とC類の間 (図13-1)

西村・西野分類に新分類を設ける必要がある遺物である。図13-2の沖縄今帰仁出土参考資料は、A-2類であり、図13-1は、図13-2より形式的に後に位置付けられる。

当類は施釉後口縁上端の釉剥ぎを行った後、口縁部を重ね合わせ、さらに、高台部どうしで重ね合わ

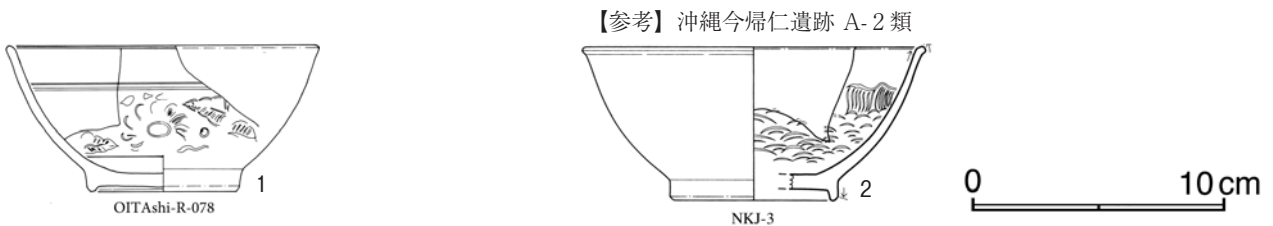


図13 口縁釉剥ぎ重ね合わせ A-2とC類の間-16世紀前半 大分：大友関連遺跡
(図13-2は金武正紀1990より転載)

せていく窯詰め法である。高台断面は縦長方形に近く、施釉後外側から接地部に削りを加えている。施釉は高台内面にまで及んでいない。16世紀半ばに位置づけられる。

大分：中世大友府内町跡第19次調査

7) 円盤トチン A-3類 (図14-1～5)

高台を非常に低く作出し、高台内を浅く削り出す。目土B-3-a類と類似するが高台部の最終調整は粗くなく、丁寧に行われている。白磁印花碗に多く応用されている。16世紀後半に位置づけられる。

大分：大友館、柳町、万寿寺、敦賀城

本州では、和歌山根来寺、大阪堺環濠都市、愛媛県湯築城周辺城下町道後町遺跡等で確認されている。

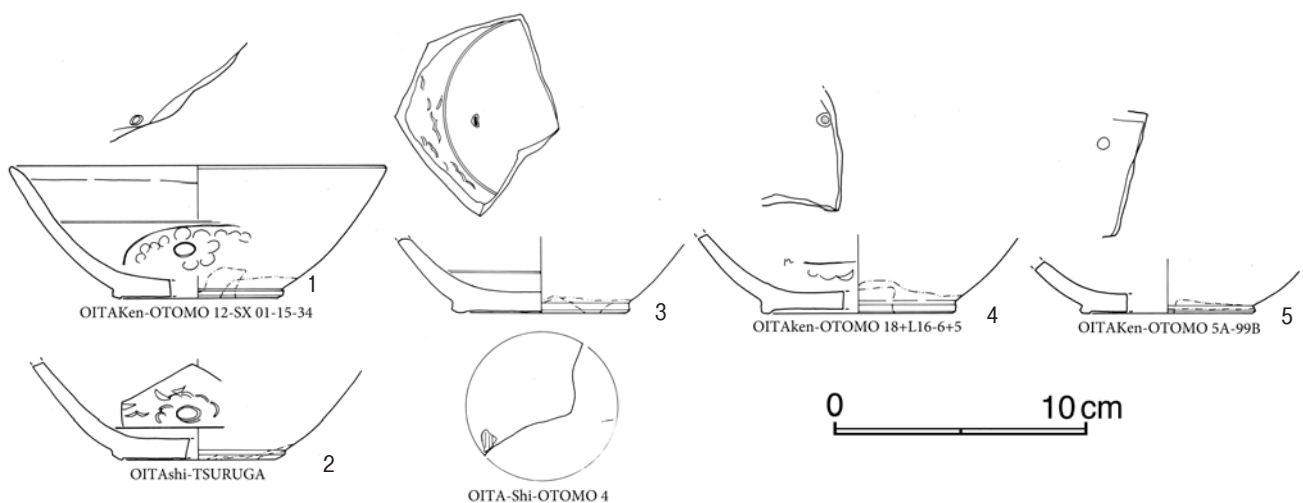


図14 円盤トチン A-3類 印花白磁碗 16世紀第3 四半期 大分：大友関連遺跡

8) 輪状の釉剥ぎ I-1 及び I-2 類 (図15-1～3)

内面に輪状の釉剥ぎ痕をもち、高台上部が厚く、下部は細く作出される。高台内は垂直に削られる。釉は接地部まで施される。16世紀前半に位置づけられる。

大分：竹田市少路遺跡 (図15-3)

長崎：雲仙市陣の内遺跡 (図15-2)

鹿児島：諏訪之瀬島切石遺跡 (図15-1)

沖縄の今本地点 (今帰仁村教育委員会資料) でも同類の碗が出土している (図15-4)。この類型の中では、ベトナム出土例で他に鳥文が多く見られるが、日本出土の4点は、同じ器形、文様であり、この青花葉文碗が選んでもたらされたことがわかる。

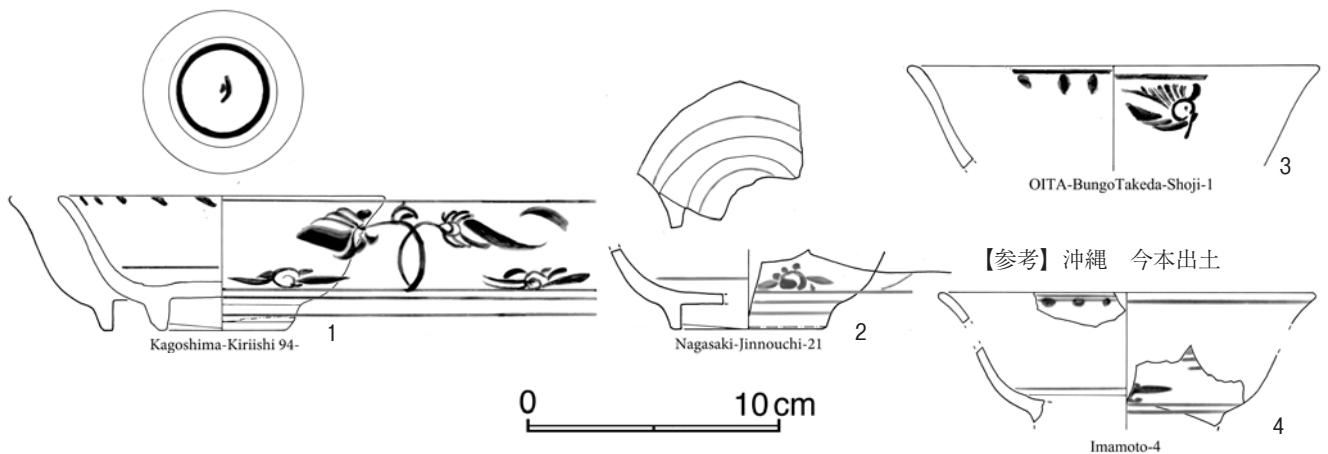


図15 輪状の釉剥ぎI-1類 16世紀前半 鹿児島諏訪瀬島遺跡、長崎雲仙市陣の内遺跡、大分竹田少路遺跡
(図15-3,4は西村昌也実測)

9) 円盤形トチンB-3類 (図16-1, 2)

高台を逆三角あるいは逆台形状に作出したもので、施釉は不完全ながらも高台までに及び、接地部をわずかに削る。17世紀前半に位置づけられる。高台内を施釉しないタイプである。長崎桜町遺跡出土の2点は、目跡をもたず、最上位に置かれた可能性が高いが、高台型式からはこの類型に位置づけられる。

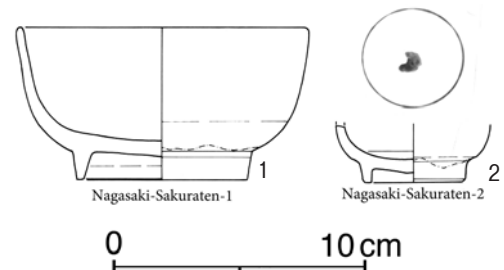


図16 円盤形トチンB-3類 17世紀前半

長崎：桜町遺跡サンガーデン地点（2000）（長崎出土例において（カッコ）内は報告書出版年を記載した。）

桜町遺跡の無地白磁碗は日本出土例が唯一の資料である。

10) 円盤形トチンB-5類 (図17)

高台内側まで全面施釉し、断面形は縦長長方形に近い高台の接地部を内外両側から削り出す。この資料には、伝世品が多く残り注文生産品であると考えられる（西野2011a）。この資料には、目跡がないが高台型式より当類形に含めた。

長崎：金屋町（2002）

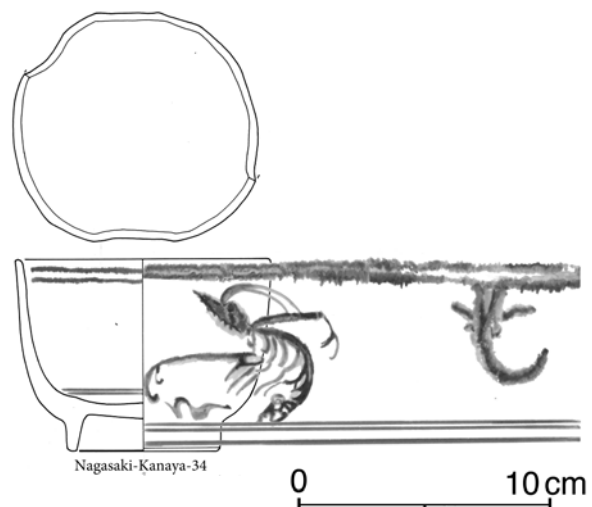


図17 円盤形トチンB-3類 17世紀前半

11) 断面円形輪状トチン A-3 類 (図18)

高台断面形を方形状に作出する。施釉範囲は体部下半までである。石川県金沢市広坂遺跡でまとまって出土したタイプである。17世紀前半に位置づけられる。

長崎：金屋町 (2002)、万才町 (2003)、万才町遺跡 (1996)

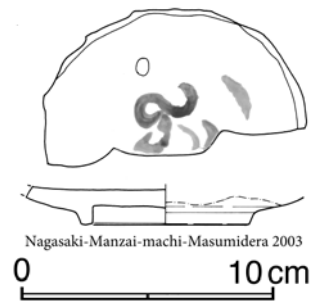


図18 断面円形輪状トチン A-3 類 17世紀前半

12) 輪状の釉剥ぎ J-2 類 (図19)

西村・西野分類の新分類であり、J類の中に含め、J-2類とした。高台上部か体部下半まで施釉され、高台断面を逆三角形あるいは逆台形状に作出し、高台内側はやや深く削られている。円盤形トチン B-3 類と高台型式は類似する。金沢の広坂遺跡で段面円形輪状トチン A-3 類と輪状の風剥ぎ K 類が共伴しているように、輪状の釉剥ぎ J-2 類と円盤形トチン B-3 類は同時期に比定できるだろう。

長崎：築町遺跡

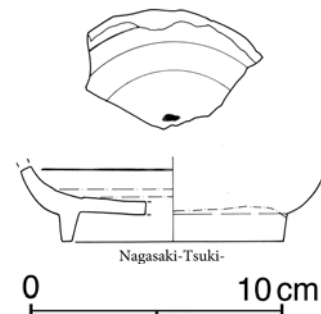


図19 輪状の釉剥ぎ J-2 類 17世紀前半

13) 輪状の釉剥ぎ K 類 (図20)

高台上部か体部下半まで位しか施釉されず、高台は内側が深く削られ、外側は斜めに作出される。断面円形輪状トチン A-3 類と同様、石川県金沢市広坂遺跡で出土している。17世紀前半に位置づけられる。

長崎：栄町遺跡 (1993)

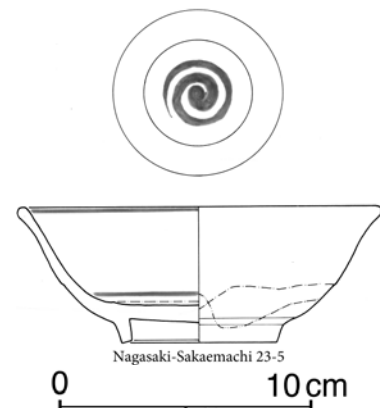


図20 輪状の釉剥ぎ K 類 17世紀前半

14) 輪状の釉剥ぎ M 類 (図21)

体部上半までの施釉、高台断面の全体形は方形で、接地部は削られている。口縁部が玉縁に作られるタイプである。17世紀後半に位置づけられる。

長崎：築町遺跡 (1997)

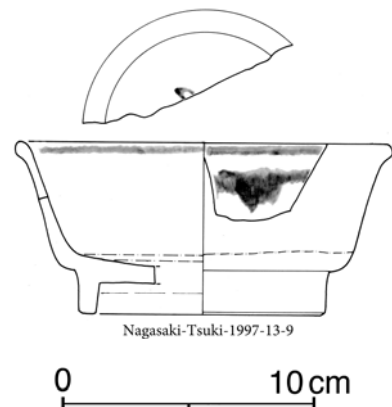


図21 輪状の釉剥ぎ J-2 類 17世紀後半

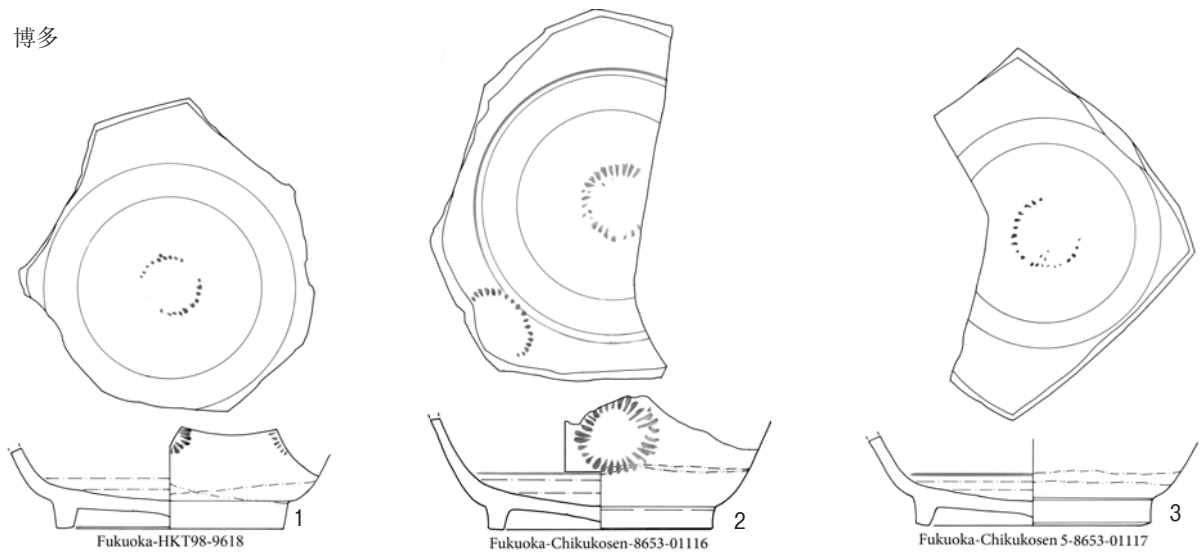
15) 輪状の釉剥ぎ N-1 類 (図22)

内面に輪状の釉剥ぎをもち、高台断面がほぼ長方形に近く、大きめに作出される。日本で出土するものは全て鉄絵菊花印判手碗である。

博多：築港線 5 次 (2 点)、築港線 3 次、博多98次

長崎：金屋町 (2002)、長崎万才町 (2009)、MZM 裁判所、金屋町 (2007)、磨屋町遺跡 (2002)、五島町遺跡 (2001)、興善町遺跡

博多



長崎

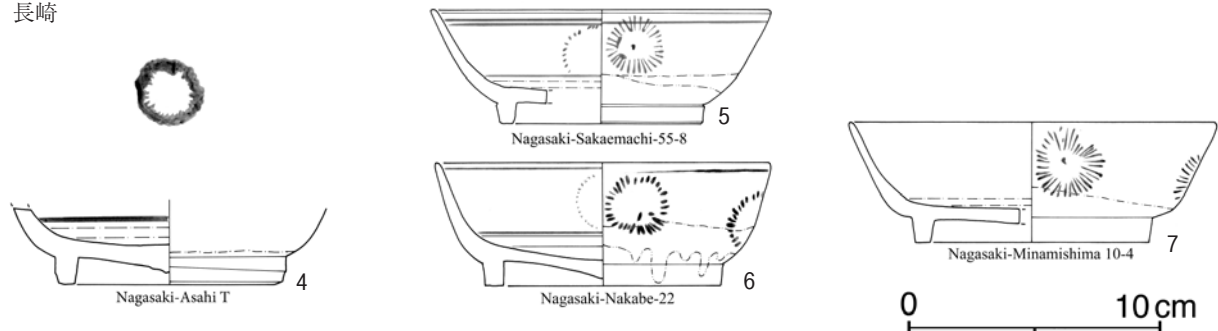


図22 輪状の釉剥ぎN-1類 17世紀後半

(2007) 3点、栄町遺跡（1993）、桜町（2008）、築町遺跡（1997）

B. 茶陶として伝世しているベトナム陶磁（図23）

九州では、松井文庫と永青文庫（細川家）において、ベトナム陶磁が伝世している。細川忠利は、1632年より肥後熊本藩の初代藩主で、父忠興は隠居所として八代城に居住した。松井家は、八代城主であり、代々、肥後細川藩の筆頭家老を務めた。

伝世する3点は全て、製品として輸入された後に、意図的に高台が挿られており、茶陶の中でも細川家と松井家所持の碗のみ「高台を挿る」という行為がなされたことは、松井家と細川家の関係の深さを物語る（西野2011a）。高台が挿られる前の原形を推測すると、以下のような高台型式を持っていたと考えられる。

1) 安南染付蓮弁文茶碗（松井文庫蔵：図23-1）は、輪状の釉剥ぎH-4類に類似し、16世紀前半から半ばに位置づけられる。

2) 安南染付壽字茶碗（永青文庫蔵：図23-2）は、凹凸のある高台をもつ深鉢であったと考えられる。文様などから16世紀後半に位置づけた（西野2011a）。

3) 安南染付筋文茶碗（永青文庫蔵：図23-3）は、円盤形トチンB-5類に所属し、17世紀前半に位置



安南染付蓮弁文茶碗 16世紀前半 松井文庫所蔵



安南染付壽字茶碗 永青文庫所蔵



安南染付筋文茶碗 永青文庫所蔵

図23 茶陶として伝世しているベトナム陶器

づけられる。

C. 碗皿以外

出土の10%から20%という出土量の少ない碗皿以外の器種に関しては、まだ、十分な分類的体系が出来ておらず、遺物の提示と碗皿の共伴などから年代観を示すにとどまった。

1) 青磁壺? ——14世紀後半

博多：博多42次青磁壺 or 鉢（体部）8843-05703

2) 青磁深鉢 ——14世紀後半（図24-1）

博多：博多35次青磁鉢高台部8648-00120、

博多124次外面劃花蓮弁文鉢0006-00761、

博多42次刻花深鉢?8843-05702

3) 淡釉内湾鉢 ——14世紀後半（図24-2）

博多：博多58次淡釉内湾鉢口縁から高台部8948-00308

大宰府：

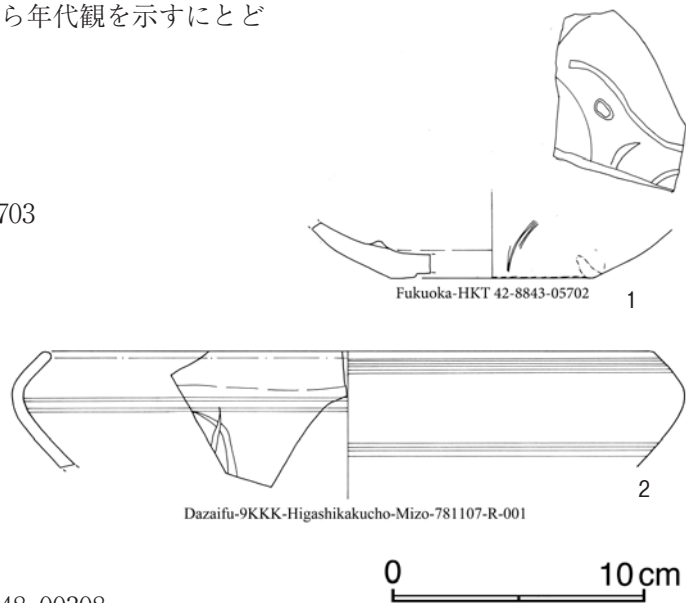


図24 碗皿以外のベトナム陶磁 1

4) 鉄絵鉢——14世紀後半

博多：博多64次鉄絵鉢（口縁部）8976-03255、博102次口縁内湾鉄絵鉢口縁部9752-00882

5) 鉄絵大皿——14世紀後半（図25-1～7）

博多：博多35次（口縁部、高台部）、築港線3次（口縁部）、博多85次（口縁部）

築港線1次（口縁部）8224-02144、築港線4次（口縁部）8527-02629、博多40次、博多74次（高台部）9126-00224博多29次（高台部）8509-00321と口縁部、博多35次（口縁部）／博多80次（口縁部）9309-02064

福岡県：八幡区八反田遺跡

大宰府：観世音寺前面第109・111次

吉岐：観城遺跡

熊本：河内浦城跡（天草市河浦町一町

田：本書の中山論文70ページ fig.8-103 参照）

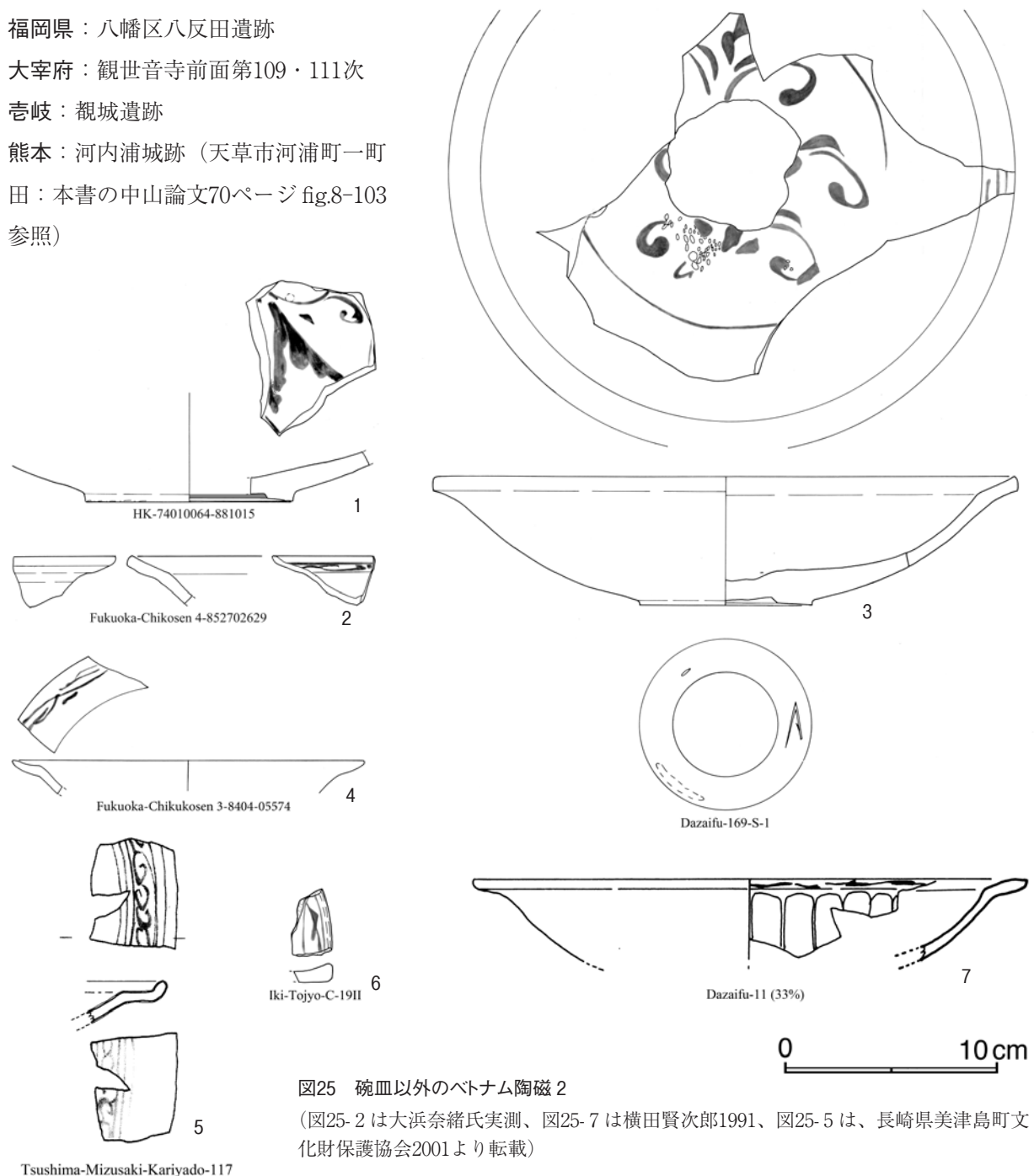


図25 碗皿以外のベトナム陶磁 2

（図25-2は大浜奈緒氏実測、図25-7は横田賢次郎1991、図25-5は、長崎県美津島町文化財保護協会2001より転載）

6) 鐙付白磁大皿——14世紀後半

唐津市：佐志中通遺跡

7) 鉄絵壺——14世紀後半

博多：築港線3次（体部）8404-05576

唐津市：佐志中通遺跡（口縁部）

8) 鉄絵たらい——14世紀後半

大宰府：

9) 鉄絵コップ——14世紀後半（図26-1, 2）

対馬：水崎（仮宿）遺跡

10) 青花盤——14世紀後半（図26-3）

大宰府：条坊遺跡第83次

11) 青花脚——14世紀後半から15世紀初頭（図26-4）

対馬：水崎遺跡

12) 青花壺体部——15世紀前半（本書の橋口論文21ページ参照）

鹿児島：南さつま市坊津町泊海岸、南九州市川辺郷地頭
仮屋遺跡

13) 青花合子——14世紀後半～15世紀初頭（図26-5）

対馬：水崎（仮宿）遺跡

14) 青花大皿——16C前半（図26-6）

鹿児島：諏訪瀬島 切石遺跡

15) 青花大皿——17世紀前半（図27-1, 2）

長崎市——金屋町遺跡

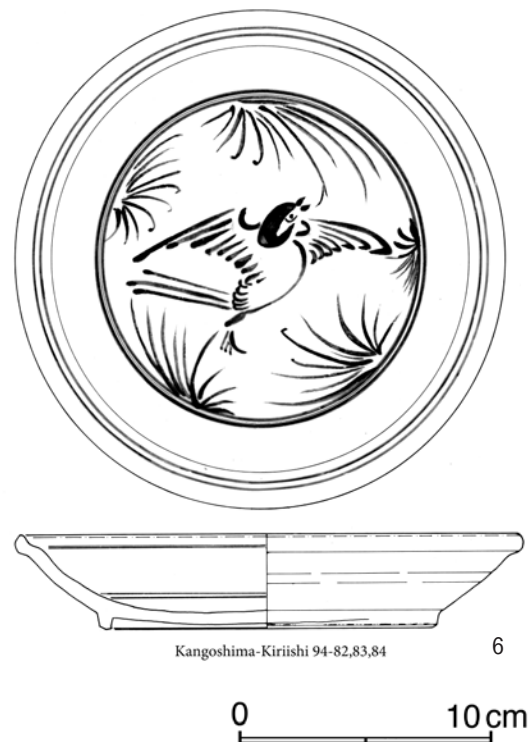
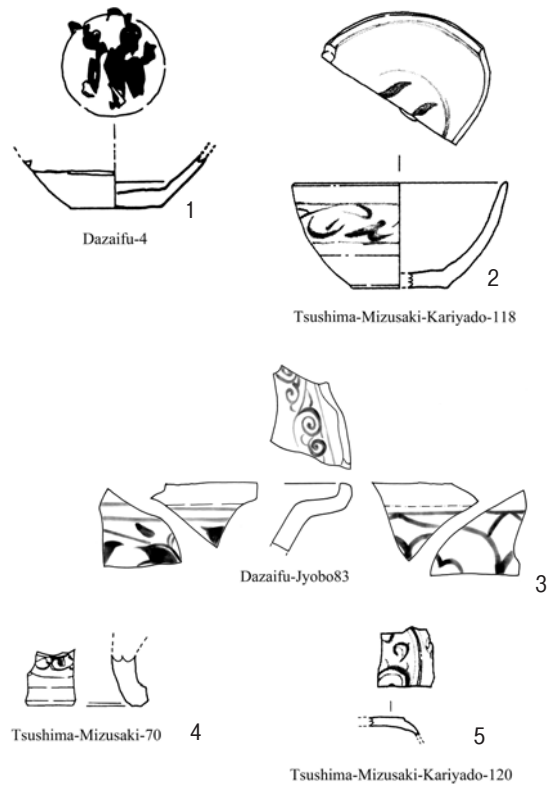


図26 碗皿以外のベトナム陶磁3

（図26-1は横田賢次郎1991、図26-2,5は、長崎県美津島町文化財保護協会2001、図26-4は長崎県美津島町教育委員会1999より転載）

D. 九州出土のベトナム焼締陶について

今回、ベトナム陶磁器に焦点をあてて研究したが、流通を考える上では、焼締陶（無釉陶器）を含めて考えな

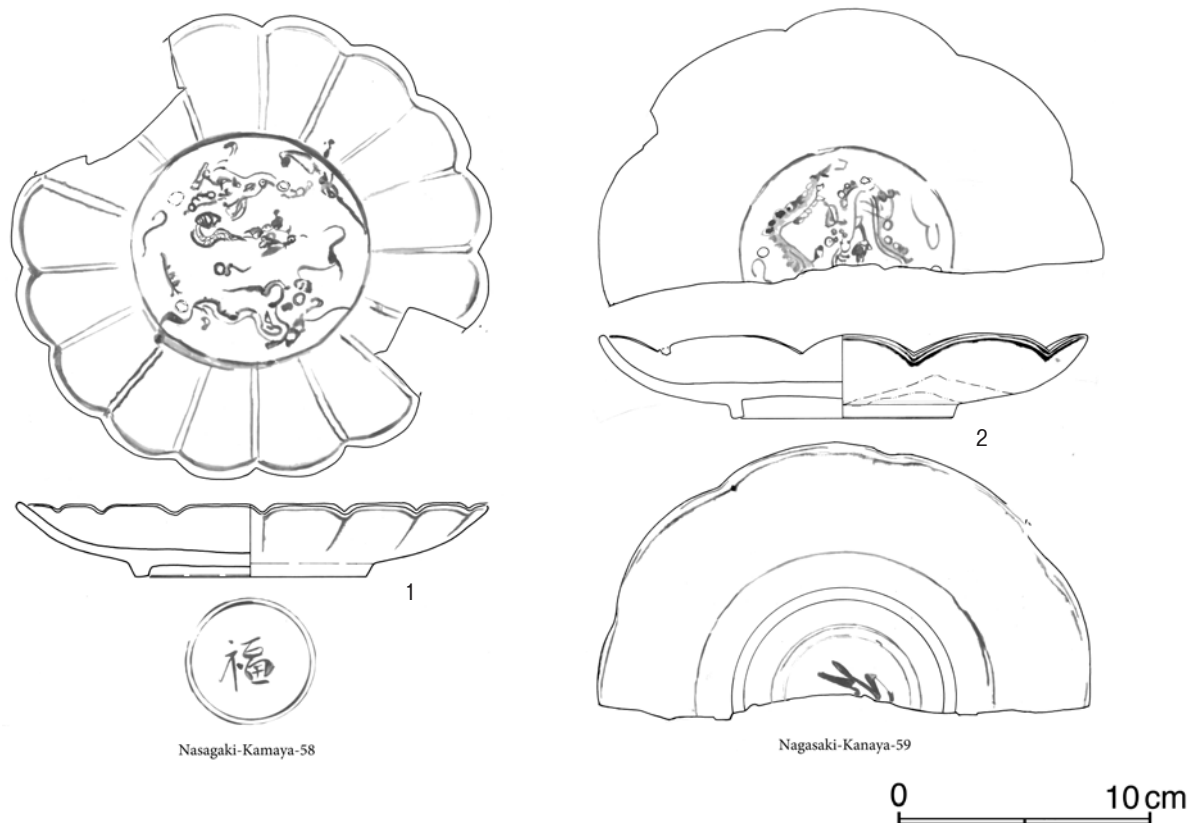


図27 碗皿以外のベトナム陶磁 4

ければならない。傾向としては、16世紀後半から17世紀にかけて日本で出土し、それ以前や以後の焼締陶は全く確認できていない。鹿児島出土例以外は、施釉陶磁器と共伴している例が多い。鹿児島の出土地点に関しては、本書橋口論文を参照していただきたい。

1) 中部焼締陶口縁部（細分が必要）

博多：博多144次、博多124次

長崎：万才町（真澄寺）2003、長崎新地唐人荷蔵跡1996、長崎金屋町 6-4-52007、五島町遺跡2001、栄町遺跡1993、桜町 8-24（2008）、築町遺跡1997

大分：大友府内町第1, 2, 3, 4, 5, 9次調査、猪野中原遺跡

鹿児島：桑幡氏館跡（他、弥勒院跡、上水流遺跡もベトナム焼締陶器の出土が報告されている）

2) 焼締め蓋

長崎：栄町遺跡1993

3) 波状文焼締壺

長崎：栄町遺跡1993、

4) 焼締め盥 (蓋として利用か)

長崎：築町遺跡1997

5) 釜

博多：博多89次

長崎：桜町8-24 (2008)

4. 貿易陶磁として海外に広く流通したベトナム初期鉄絵、青花碗の年代再考

ベトナム初期鉄絵及び初期青花は、14世紀半ば、海外交易が盛んになる時代の初頭に出現し、早くから注目されてきた。ベトナムの初期鉄絵と初期青花に関する考察の多くは「14世紀後半から15世紀初頭(もしくは15世紀半ば)」と年代を区切って論じられてきた(森本1993、首里城における年代認識等)。

今まで諸研究者が時期区分を行った「14世紀半ばから15世紀初頭もしくは半ば」といえば、ベトナム史では、陳朝期(～1400年)から胡朝期(1400年-1407年)、そして属明期(1407年-1427年)と初期黎朝(1427年～)という4時代を跨いでいる。ベトナム史の劇的な歴史的変化のあった時代を、一時期にまとめるには、年代幅が広すぎる。よって、「初期鉄絵」「初期青花」の再分類と編年案の見直しを行いたい。重ね焼き技法、高台型式、高台部の成形技法の差異から分類を行った。年代差や型式変化の流れを理解する為に、細かな差異を読み取ることを目指して分類した。14世紀初期鉄絵・青花の生産地であるキムラン村の発掘調査出土品を軸にして、各分類の型的な繋がりや年代の明らかな資料を参照して編年案を作成している。ここでは簡単に紹介し、詳しくは、西野(2011b)を参照していただきたい。

4-1. ベトナム初期鉄絵・青花の分類

初期鉄絵・青花碗1類(図28-1)：輪状の白色土を重ね焼き痕として持ち、高台断面形を低い逆台形に作出する。筆を器面に押しつけただけの単純な草文が描かれている。

初期鉄絵・青花碗2類(図28-2, 3)：内面にトチン跡を持つ。高台接地部に5つ足のトチンを設置して窯詰めする。高台断面が低い逆台形であり、1類と類似する。文様は1類よりも細かく描かれている。筆先を太めに使い、半楕円形などで表した簡単な文様を数点描く。文様は破片で分かりにくい「楕円形の半円文の中に点」文が数カ所に描かれている。この文様は後の時期に口縁部下の文様帯に描かれる。

初期鉄絵・青花碗3類(図28-4)：内面にトチン痕を持ち、高台接地部に5つ足のトチンを設置して窯詰めする。成形から調整まで非常に丁寧に作られている。高台内の削りも細かく丁寧に削られている。高台は低い逆台形だが、高台内は外側に比べて浅く削られている。釉は高台外側の中位より、白化粧は体部下位より、水平に施されるのが特徴的である。

初期鉄絵・青花碗4類(図28-5, 6)：内面にトチン痕を持つ。高台接地部に5つ足のトチンを設置して窯詰めする。高台は比較的高めに断面長方形に作出され、高台内側の削りに段差があるのが特徴的である。内面には鉄絵で草文や菊花文が描かれる。

壱岐-観城 TJ-8-SD-7-124 (図28-5)

福岡－福岡城9910-1577（図28-6）

初期鉄絵・青花碗5類（図28-7～22）：内面にトチン跡を持ち、高台接地部に5つ足のトチンを設置して窯詰めする。断面形は、四角形もしくは逆台形状に小さく作出される。高台接地部外側が緩やかに削られ（もしくはなでられ）、はっきりと削らない。西村・西野分類「断面扁平形トチンB-2-b類」と同類である。

初期鉄絵・青花6類（図29-1）：低く逆台形状に作出された高台の接地部を施釉後鋭く削る。釉は高台外側下位まで、白化粧は体部下位まで施されている。

例：太宰府6KKZ-BS30ME64-770718（図29-1）は、鉄絵で内面に花文を描くが、いわゆる「側視菊花文」ではなく、雲文の描き形に似た菊花文を描く。高台内全面に鉄銹を塗布される。

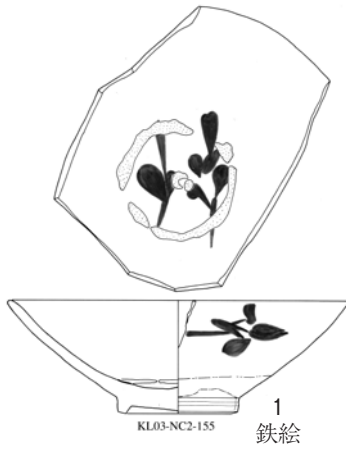
初期鉄絵・青花7類（図29-2）：高台を長形状に削りだし、高台接地部まで施釉し、高台接地部外側を削らない。内面は、青花による菊花文が細い筆先で描かれるが、花卉が、側視菊花文の描き方とは異なり、半円を連ねて描いている。体部外面上位には、雲文と唐草文が描かれる。外面の体部下位に蓮弁が施される。

初期鉄絵・青花8類（図29-3～13）：内面にトチン跡を持ち、高台接地部に5つ足のトチンを設置して窯詰めする。高台は前出の類型よりも高く作出し、施釉後、高台接地部をはっきり削るのが特徴的である。西村・西野分類の「断片扁平形輪状トチンのB-2-c類」と同型である。二階殿出土青花碗（図29-10）は、胡朝城の南郊壇出土青花碗（図29-11）と非常に類似している。胡朝城の南郊壇は、1402年8月に造営され²⁾ 胡季犛が1407年に滅ぼされているので、図29-11の年代を15世紀初頭前後に位置づけられる。この類型には、菊花文にヴァリエーションがある。図29-3、5～7、11は、花卉が花芯の下方にのみ描かれる「側視菊花文」である。図29-4は文様が不明である。図29-8、9は、菊花文の花芯が雲文の描き方に類似して描かれた側視菊花文である。細い筆先で描かれる。図2-10の菊花文は半楕円を重ねるように花卉が全方向に描かれた正視菊花文である。花芯の中に斜行線が描かれ、花卉は半楕円を重ねていくように描かれる。図29-12は、花卉が尖る新出の花文である。この類型の中では最も新しい年代が与えられよう。図29-13は、文様が不明である。様式からは、「側視菊花文」→「雲文の描き方に類似した菊花文」→「正視菊花文」→「花卉が尖る花文」という順序が与えられる。南郊壇が機能した1402年から1407年前後、つまり14世紀末から15世紀初頭の年代が与えられよう。

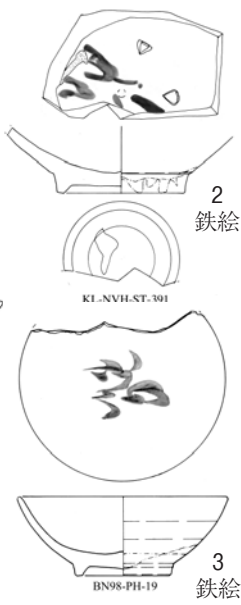
初期鉄絵・青花碗9類（図29-14～16）：高台内面にまで釉がかかっている。鉄銹は塗布されない。蔓草文は、細い筆先で線を描いた後、太くしたい部分をさらに上から描き足す。菊花文は、花卉に変化がみられ、2度筆を下ろす（図29-16）、もしくは三度下ろして一花卉を描く（図29-14）。花心には斜格子文が描かれている。菊花文周囲に描かれる唐草文も、細い線だけではなく、線を描いてその線上に筆を足して葉文にしたり（図29-15）、細い筆先で輪郭を描き、中を塗りつぶして葉文が描かれている（図29-16）。外面下部には、ラマ弁が描かれている。

2) 大越史記全書より

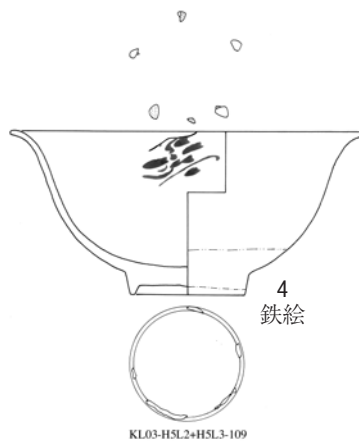
碗1類



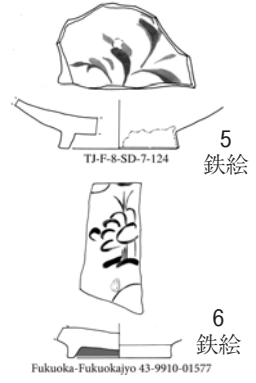
碗2類



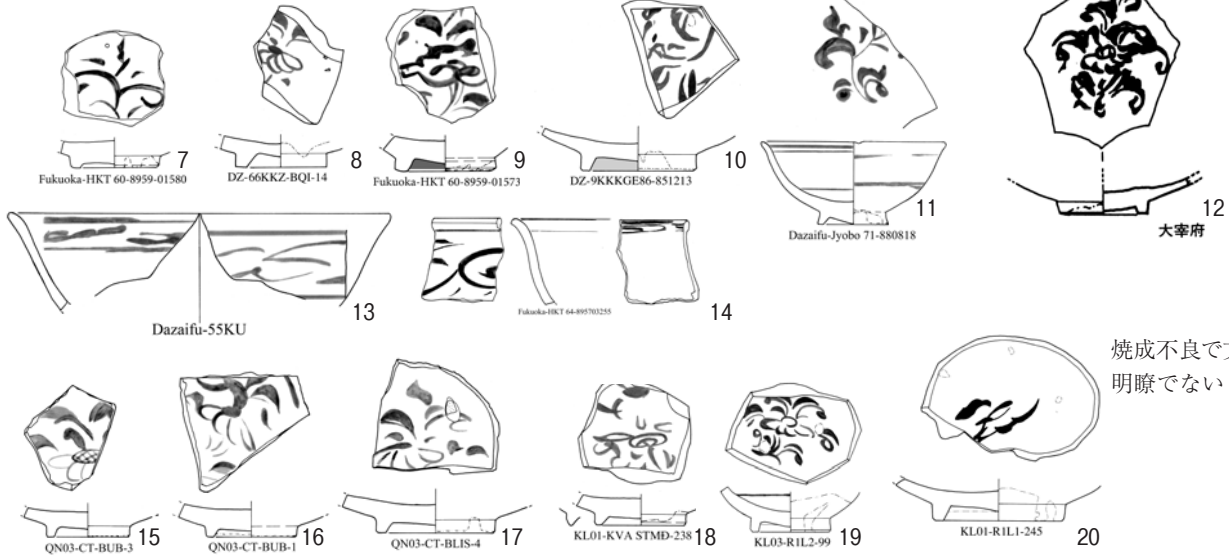
碗3類



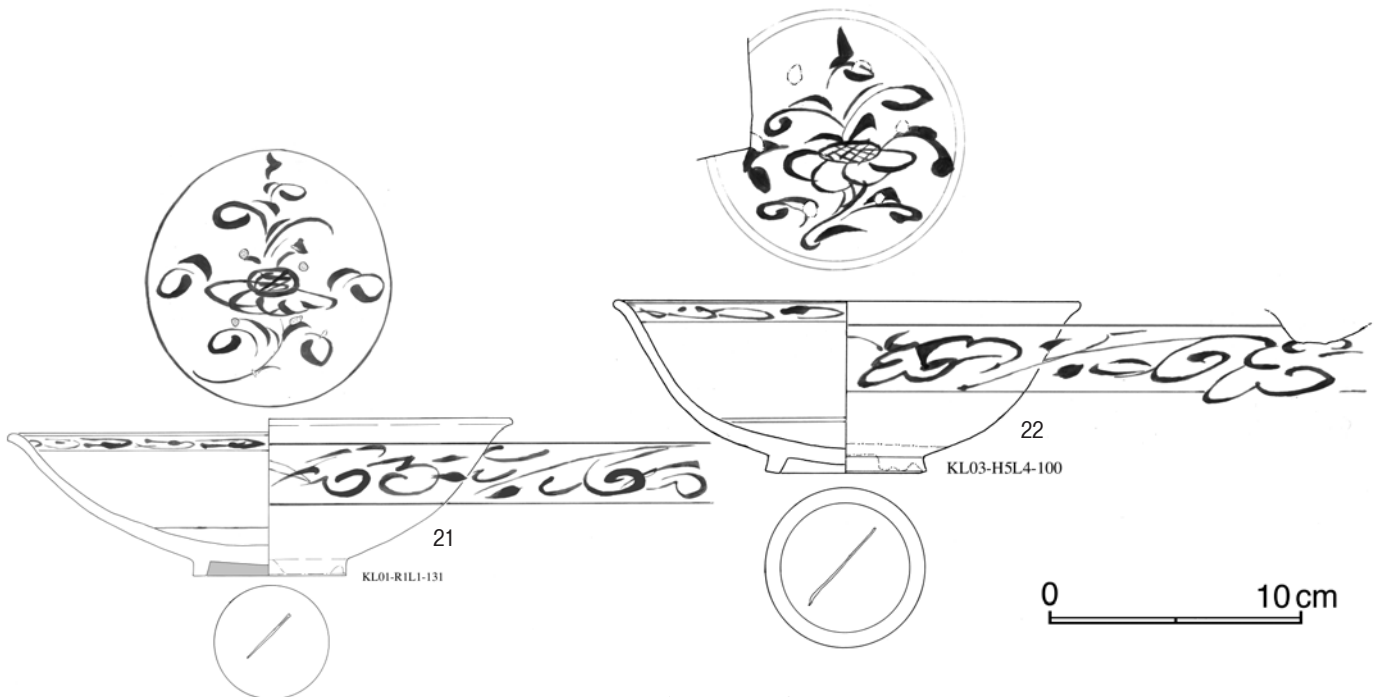
碗4類



碗5類 (すべて鉄絵)



焼成不良で文様が明瞭でない



0 10cm

図28 初期鉄絵・青花碗の分類 - 1

4-2. ベトナム鉄絵・青花碗の編年案（図30）

西野の陳朝期の研究（西野2002）から、白色土の重ね焼き痕を持ち、高台断面形が四角形状に成形される陶磁器は、13世紀末から14世紀初頭に位置づけられる。この中に初期鉄絵・青花1類が含まれる（図30-1）。

キムラン社バイナムゾン遺跡出土資料は、生産址と考えられるため、同じ技術系統で変遷が捉えやすい。初期鉄絵・青花2類（図30-2）は、高台を小さい逆台形に削り出し、初期鉄絵・青花1類に繋がる型式である。また、初期鉄絵・青花碗5類（図30-5, 6）は、高台作出後、接地部を曖昧に削られる、もしくはなでられるタイプであり、初期鉄絵・青花碗2類に後出すると考えられる。そして、初期鉄絵・青花碗8類（図30-9～11）は、高台接地部をはっきりと削るタイプであり、5類の後に繋がる。上記より、初期鉄絵・青花1類→2類→5類→8類という高台型式の順序が確定できる。

大宰府や壱岐で出土する最初期の鉄絵青花は、高台断面形を長方形に削り出した後、高台接地部際の調整を行わず、初期鉄絵・青花4類と5類に所属する。大宰府や壱岐出土最初期の陶磁器の年代は、日本出土の年代観より1350年頃と設定しておく。大宰府出土の初期鉄絵・青花碗6類（図30-7）は高台接地部を削るなどの調整が加えられ、初期鉄絵・青花碗5類よりは下る可能性があるが、初期鉄絵・青花碗8類とは削り方が異なり、初期鉄絵・青花碗8類よりは前に位置づけられると考えられる。しかし、文様が図28-9に類似することから、初期鉄絵・青花碗5類と時期的に離れていない。初期鉄絵・青花碗7類（図30-8）は、高台接地部を削らないが、体部の立ち上がり方が、初期鉄絵・青花碗8類に類似し、初期鉄絵・青花碗5類より後に位置づけたい。図30-12は15世紀初頭前後に位置づけられ、8類を14世紀末（1400年より10年から20年前程と設定しておく）から15世紀初頭に位置づけた。そして、初期鉄絵・青花碗9類は、図30-12より後に位置づけられるため、1407年以降であることは推定できるが、第1四半期に収まるのか、第2四半期に収まるのかは、今後検討していく必要がある。

4-3. 九州出土のベトナム初期鉄絵・青花碗の見直し

ベトナム初期鉄絵・青花碗の年代観がより詳細になったことで、14世紀後半から15世紀初頭（もしくは前半）と捉えられていた年代観の見直しを行ってみたい。

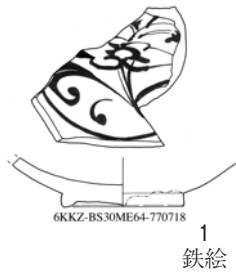
日本にベトナム初期鉄絵・青花碗が出現した14世紀半ばから15世紀前期までを3期に分けることが可能である。筆者の時間不足から、日本出土のベトナム鉄絵碗のすべてを詳細に観察することができなかったため、今回は14世紀後半とまとめたが、日本の初期鉄絵碗のほとんどが14世紀中頃から14世紀末前までに含まれる。14世紀末から15世紀初頭に位置づけられる資料は、天草棚底遺跡の青花口縁部片、熊本県玉名市隅部文秀氏採集の青花口縁部³⁾などが挙げられる。

15世紀初頭（1402-1407頃）に位置づけられるものは、博多出土の輪状の釉剥ぎをもつ青磁碗のみである。

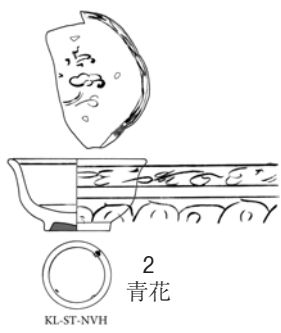
また、坊津出土の青花壺体部を当初14世紀後半に位置づけていたが、橋口氏が本書で論じたように、

3)「菊池川川床遺跡」と呼ばれ、菊池川の3箇所、陶片資料が採集された。（玉名市立歴史博物館村上晶子氏のご教示による）

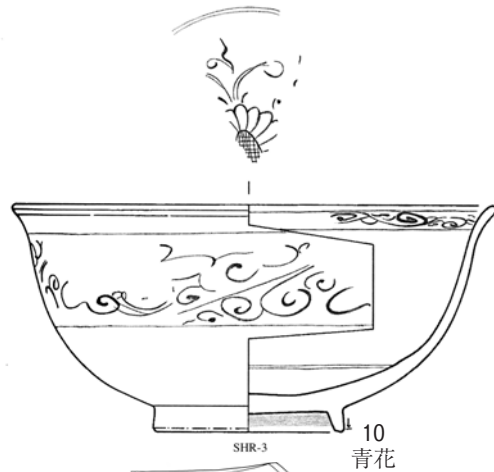
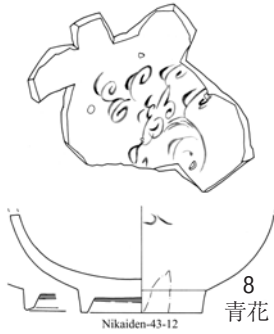
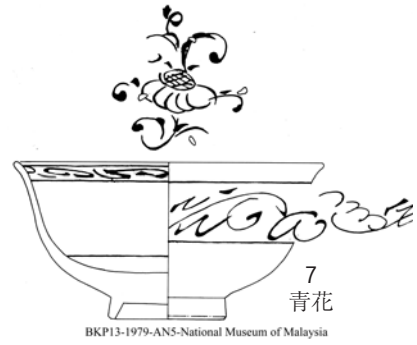
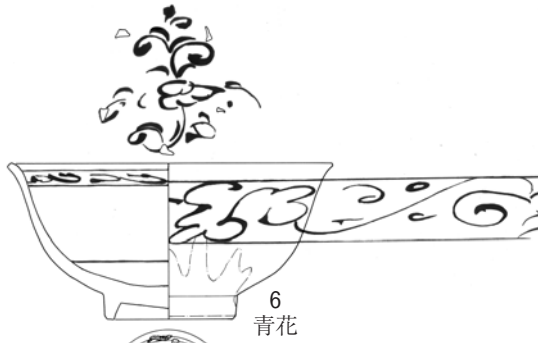
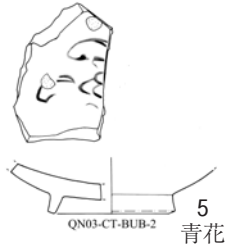
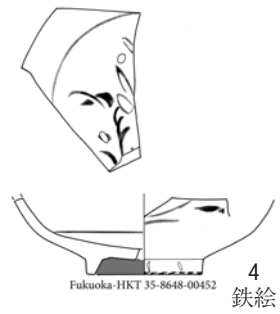
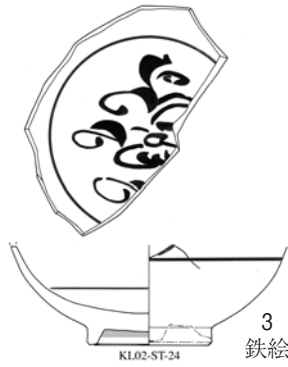
碗 6 類



碗 7 類

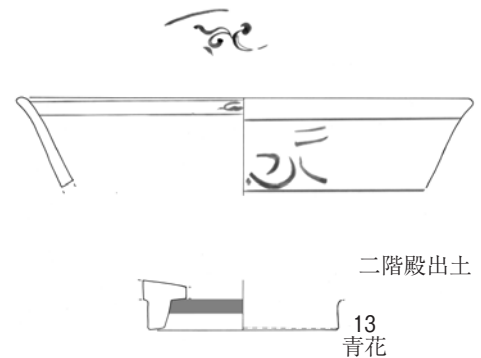


碗 8 類



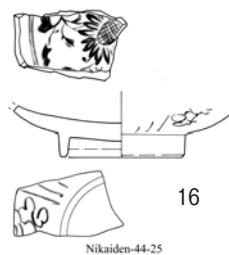
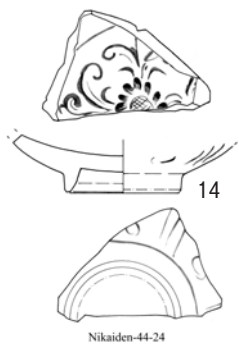
タインホア胡朝城南郊壇出土青花碗
(西村昌也氏撮影)

11



二階殿出土

碗 9 類 (すべて青花)



(図29-1は大浜奈緒氏、
6,7,8,9,12,13,14,16は西村昌也氏による実測。図29-10,15は沖縄埋蔵文化財センター 2005より転載。)

0 10cm

図29 初期鉄絵・青花碗の分類 - 2

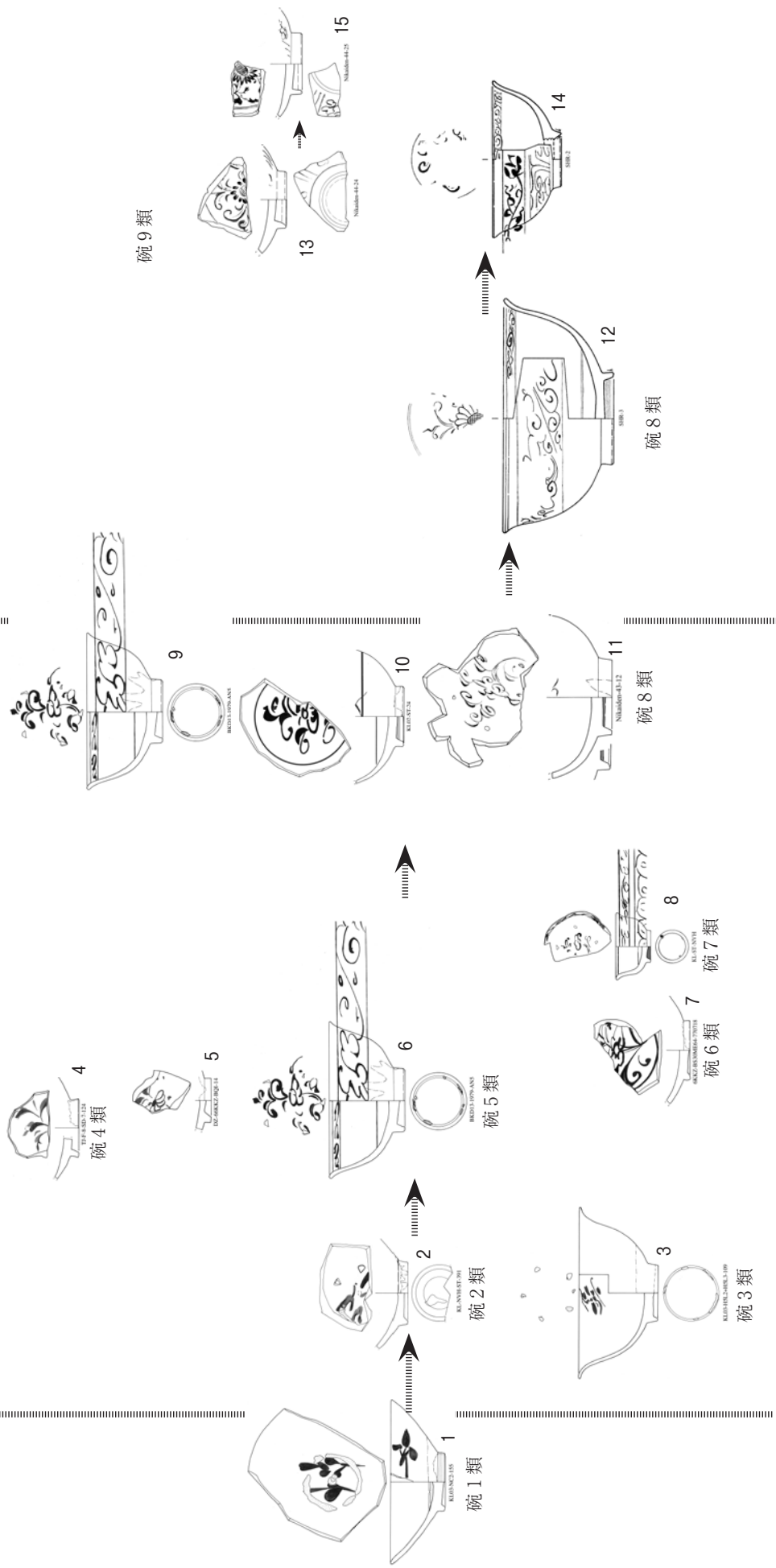
13世紀後期

14世紀前期

14世紀中期

14世紀後期

15世紀前期



沖繩出土開始

太宰府・志岐・対馬・博多

出土開始

図30 ベトナム初期鉄絵・青花碗の編年

南九州市川辺郷地頭仮屋遺跡出土の青花壺片と類似しており、15世紀の年代を与えてよいだろう。ベトナム初期鉄絵・青花碗の研究（西野2011b）からも、形式化されたラマ式蓮弁を持つ碗は、15世紀初頭以降（ベトナム初期鉄絵・青花碗9類以降）であり、14世紀後半に位置づけられる蓮弁は、肩の張らない蓮弁が描かれると考えられる。

5. 各年代における流通とその背景

各時期別に、ベトナム陶磁器が出土した九州における各地点の分布図を提示する（図31～図37）。

1) 14世紀後半（図31）

対馬、壱岐、大宰府、博多、唐津、伊万里、北九州、大分など九州北部域を中心とし、天草、鹿児島坊津の九州西岸へも流通する。この時期は、ベトナム国内においても、陶磁器のヴァリエーションが増え、多様な製品を生産した時期である。主に、鉄絵、青花、印花青磁、無文淡色釉、褐釉、内白外褐釉などの陶磁器であり、また、高台内に鉄錆が塗布されるものが多いのも特徴である。この時期の陶磁器は、多くの研究者が指摘してきたように、早田氏・佐志氏や倭寇集団が流通を担ったのだろう。

14世紀後半は、2期に分けることが可能で、1期（14世紀半ばから14世紀末前）、2期（14世紀末：14世紀最後の10年から20年）に分けられる。14世紀末（15世紀初頭が含まれる可能性がある）に位置付けられるのは、熊本県棚底城跡出土青花口縁片と玉名市青花口縁片である。14世紀末に極端に出土量が減っていることがわかる。1期のタイプは、沖縄では確認できない。森本がすでに指摘しているように、14世紀半ばから14世紀末までは、沖縄を經由しない、東シナ海内での交易ルートがあったことが言える。

14世紀末（2期）以降は、沖縄出土ベトナム陶磁と共通の陶磁器も確認で



図31 14世紀後半

きるが、極端に出土量が減ることにも留意したい。

2) 15世紀初頭（図32）

ベトナムの胡朝期（1400年から1407年）に胡朝城で出土するタイプをここに位置づけている。
今、認識できているのは、博多出土の見込みに輪状の釉剥ぎを持つ青磁碗のみである。

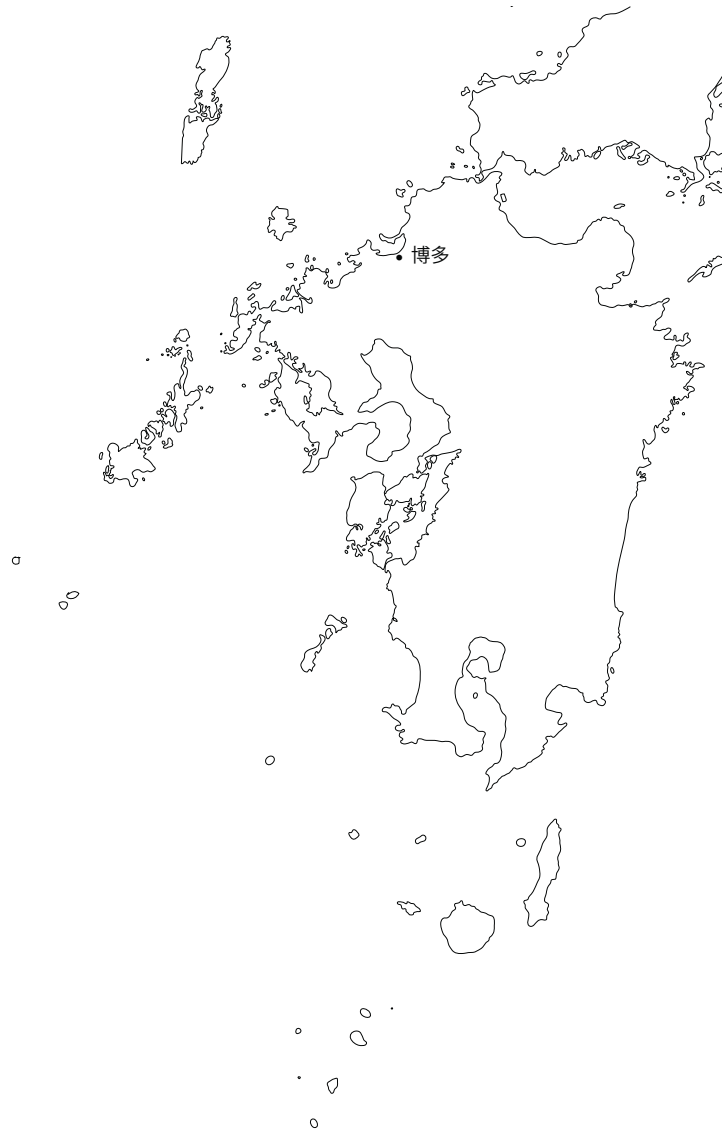
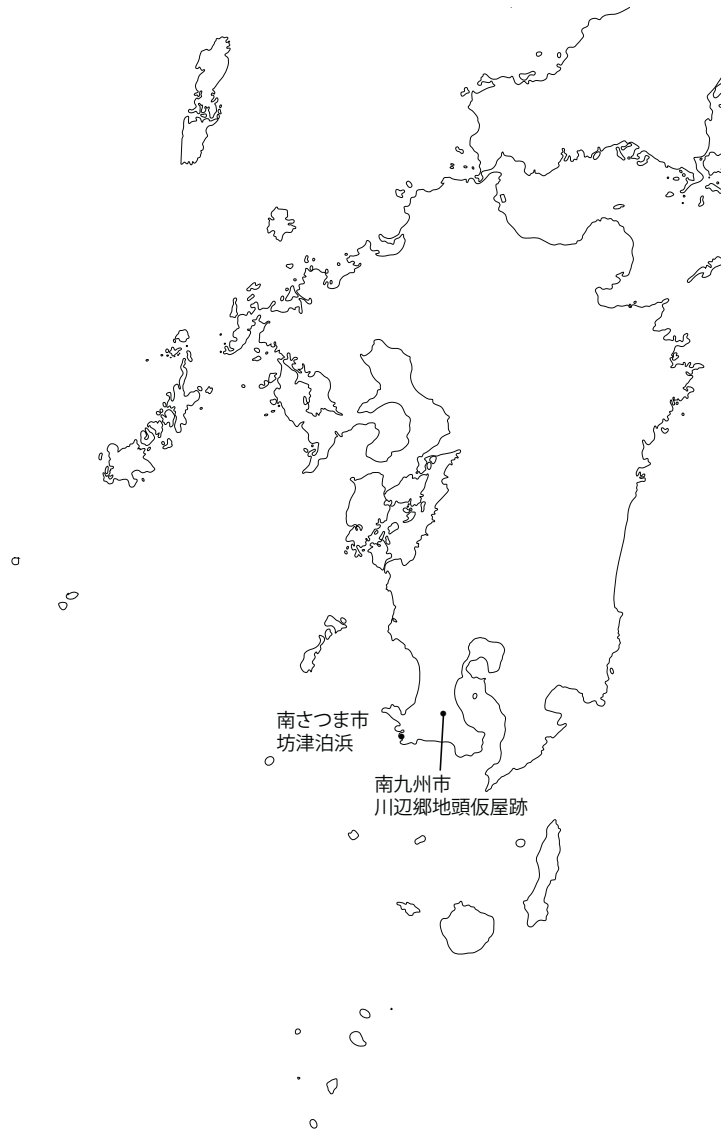


図32 15世紀初頭

3) 15世紀中期 (図33)

15世紀の中頃、琉球（沖縄）ではさかんに交易が行われていた時代であり、いままで九州での出土例は見られなかったが、本書の橋口論文により、鹿児島島の2地点のみからベトナム青花壺片が明らかにされた。この時期、九州のなかで、薩摩が琉球と関係を持っていたという可能性が指摘できる。



4) 15世紀後期

この時期に比定されるベトナム陶磁は九州では全く出土していない。

5) 16世紀前半（図34）

長崎雲仙、鹿児島諏訪之瀬島、大分竹田市、沖縄の今本地点で、青花の同類の文様をもつ同器形の青花碗が出土する。この青花碗もベトナム国内において、一般的に生産、流通しているタイプのものである。また、大分で印花白磁碗が1点（図13-1）出土しており多量に出土するタイプ（図14）以前の時期に位置づけられる。唯一海に面していない竹田の出土例については、文献から大友氏との関連性が強い館であることが指摘されている（大分県久住町教育委員会2000）。この青花碗は日本国内において、この4点だけが確認され、数量の限られた資料である。

他に、松井文庫にこの時期に位置づけられる青花碗が茶陶として伝世している。松井家は、八代城主であり、代々、肥後細川藩の筆頭家老を務めた。この伝世品は日本では他に例のないものである。

また、華南三彩などの日本出土では珍しい資料と共に出土しており、ベトナム青花も奢侈品として、選ばれて運ばれた可能性が高い。

16世紀半ばには、後期倭寇による密貿易が指摘されているが（中島・桃木 2008）、こうした資料は、後期和寇の活動がさらに遡ることを示しているのかもしれない。



図34 16世紀前半

6) 16世紀後半(図35)

九州では、大分の大友関連遺跡のみで出土する。中部長胴瓶と印花白磁とが出土することから、ベトナム北部で陶磁器を仕入れて、ベトナム中部経由もしくは中部から北部経由で運ばれたのだろう。

また、このタイプの白磁印花が本州では、大阪城、堺、和歌山根来寺などで出土し、大分から本州に流通した可能性がある。森村(2002)の指摘するように、大阪城、堺、大友を結びつけるものは、茶道であろう。豊臣秀吉(1537-1598)が、大友宗麟(1530-1587)は珍しいものを持っていると認識していたという内容の記述が残っていることから(坪根 2006)、宗麟が秀吉に印花白磁碗を献上したのかもしれない。また、宗麟が他にはない特別な交易関係を持っていたことも明らかである。谷(2001)が明らかにしたように、天正年間(1573-1592)に従来の中国陶磁を中心とした茶の湯用陶器が徐々に使用比率を減少し、日本産や朝鮮産の新しい陶磁器が採用されていく。北部ベトナム製印花白磁碗もこの変化

の波に乗った可能性が高い。16世紀後半は、大分の大友関連遺跡からの出土のみであり、大友氏は独自の特別な交易関係を持っていたのは間違いないだろう。大友だけが特別に持つ関係といえ、やはりポルトガル船の可能性が高いだろう。その他、福建省の商人⁴⁾の交易によってベトナム陶磁器が流入した可能性もあり、今後検討していく必要がある。



図35 16世紀後半

4) 松浦(2007)が明朝において1567年に私人の海外貿易が認められ、福建省の商人などによる交易を指摘している。

7) 17世紀前半（図36）

出土品は長崎に集中する。茶陶として細川家伝世品が熊本に所蔵されている。この時期に位置づけられる陶磁器は、茶陶として注文生産された「安南絞手」と、ベトナムで一般的に流通していたベトナム陶磁である。「安南絞手」は、金屋町遺跡から碗1点と皿数点の出土例が確認できている。「安南絞手」は伝世品が多く、出土例は日本全国で、この金屋町と京都、大阪だけである。他のベトナム陶磁が伝世されず破棄されてきたのに対し、注文生産された「安南絞手」が多く伝世しているのは、それらが珍重されてきたことを示す。尾張徳川家や京都下鳥羽の大沢家などが所持しており、大沢家当主四郎右衛門は江戸初期、長崎代官を務め、朱印船貿易に活躍した末次平蔵の船の長として乗船していたとされる。金屋町遺跡の安南絞手は、朱印船貿易によって長崎経由で運ばれたのだろう。

長崎では、ベトナムで一般的に流通していた鉄絵碗、鉄絵皿、白磁碗も多種出土しており、注文生産品だけでなく、一般的に生産されていた陶磁器も購入していたことが分かる。

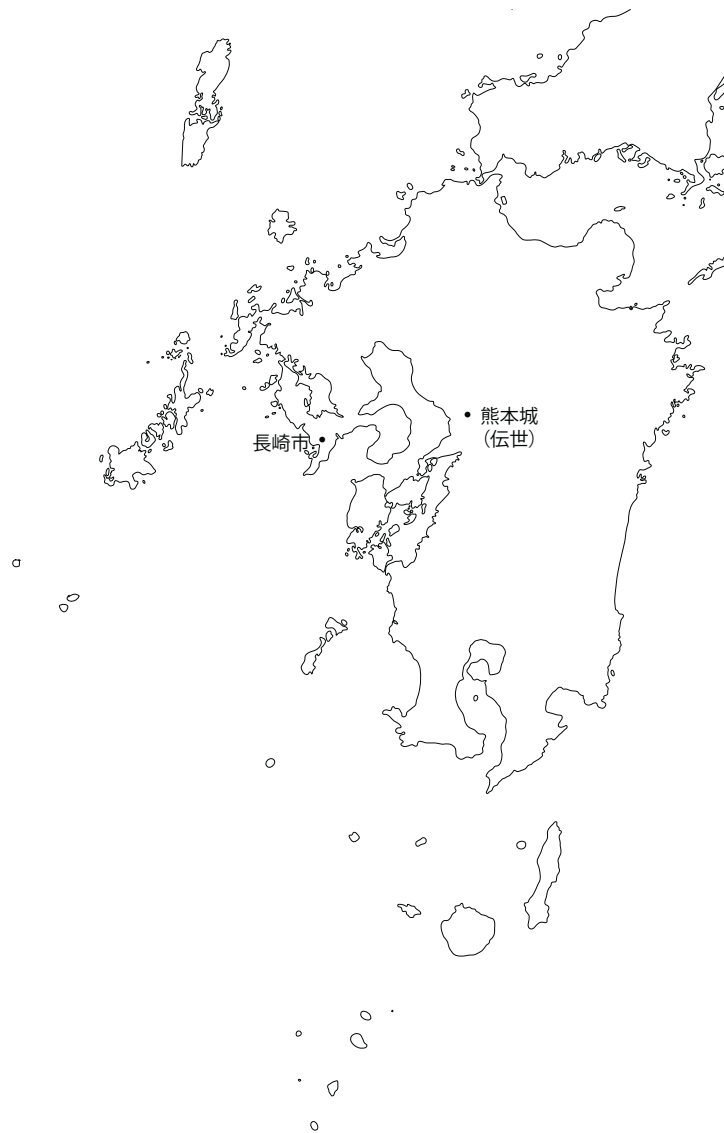


図36 17世紀前半

8) 17世紀後半(図37)

鉄絵菊花印判手碗が長崎と博多で多量に出土する。これらは、所謂雑器であり、高級品ではない。ベトナム国内においても、この時期、碗皿類は雑器しか生産されず、高級品は肥前磁器や中国磁器が使用されている。

大橋氏が指摘するように、オランダ東会社の記録「トンキンからのジャンク船が粗製磁器の碗10000個積んで入港」された粗製の磁器碗が、この鉄絵印判手であろう(大橋康二2001)。このような雑器が流通するのは清朝の遷界令や海禁令の影響と考えられる。長崎五島町遺跡において、寛文3年(1663年)の大火以前の層で出土した菊花鉄絵印判文碗は、日本の出土例中では最も古いものである。

そして、この鉄絵菊花印判手碗を最後に、ベトナム陶磁器は日本に運ばれることはなくなった。また、18世紀以降は、ベトナム陶磁の質がさらに低下した時代でもある。

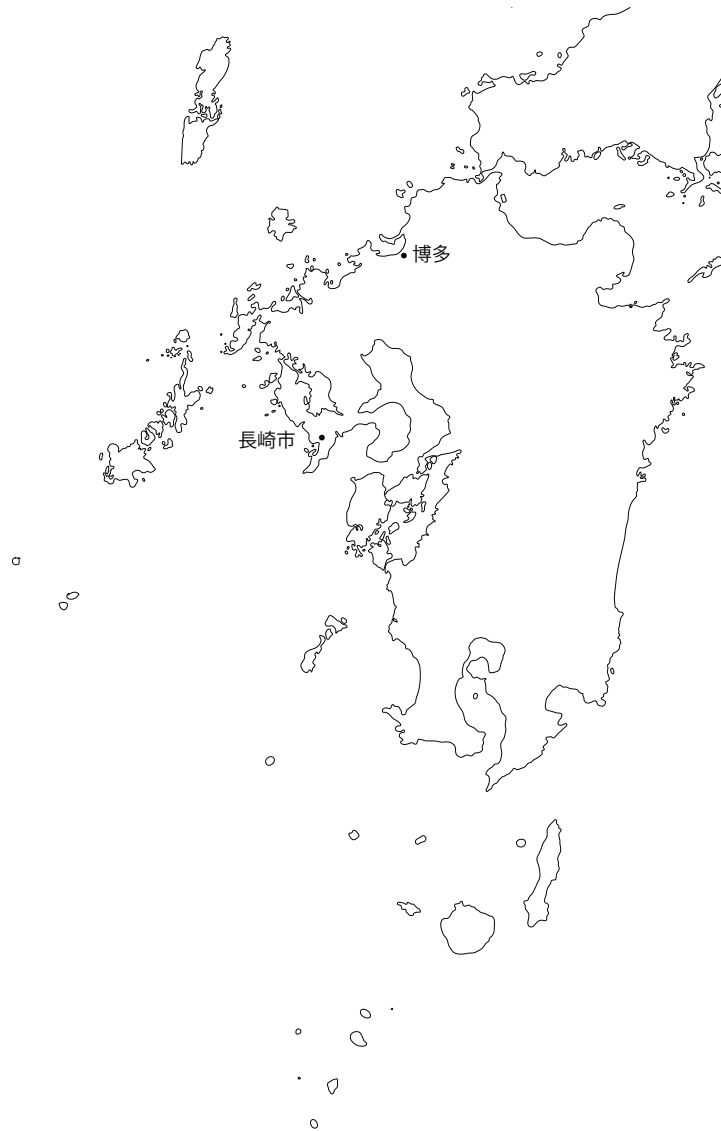


図37 17世紀後半

終わりに

今まで、多くの研究者が日本出土のベトナム陶磁について論じてきたが、今回、細かく年代比定していくことで、陶磁器の出土分布や出土量から、ベトナムと関連した交易活動状況がより明確になったのではないだろうか。

今後の課題としては、碗皿以外の体系的な分類による詳細な年代比定の研究、ベトナム焼締陶の年代ごとの分布図作成、そして、同じ時期設定でのその他の東南アジア陶器や中国陶磁器の出土分布図などを明らかにできればより、確かな交易史が語れると考えられる。今後の課題としたい。

謝辞

資料実見にあたり色々ご教示くださった、坪根伸也氏、吉田寛氏、川口洋一氏、扇浦正義氏、佐々田学氏、田上勇一郎氏、辻田直人氏、甲元眞之先生、山野ケン陽次郎氏、阿比留伴次氏、俵寛司氏、大分竹田市、大宰府ふれあい館のみなさま、横田賢治郎氏、芥川博士氏、村上晶子氏、隅部文秀氏に、新出資料のご教示を頂いた中山圭氏、橋口亘氏に、感謝申し上げます。またこの度、陶磁器からみた文化交渉学として論文を書く機会を与えてくださった荒武賢一朗氏に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 有島美江 1991「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』11号：11-130
- 大分県久住町教育委員会 2000『小路遺跡 上屋敷遺跡 県営担い手育成圃場整備事業都野西部築に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 大分市教育委員会文化財室2001『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度、大分市教育委員会
- 大分市教育委員会 2004『大分市文化財調査報告書 第49集、大友府内7 中世大友府内町第1・2次調査報告』大分県周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 扇浦正義「近世貿易港としての長崎とベトナム」『近世日越交流史——日本町・陶磁器——』柏書房：253-282
- 扇浦正義・川口洋平 2004「長崎出土の東南アジア陶磁」『陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』15-30.
- 大橋康二・山田康弘 1995「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬島遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.15 日本貿易陶磁学会
- 沖縄埋蔵文化財センター 2005『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集 首里城跡——二階殿地区発掘調査報告——』
- 大橋康二2001「長崎市五島町遺跡出土のベトナム産鉄絵印判花文碗について」『五島町遺跡』長崎市埋蔵文化財調査協議会
- 川口洋平 2003「産地不明の貿易陶磁——対馬・壱岐・長崎——」『貿易陶磁研究』no.23：58-69
- 河野史郎 1999「中世大友城下町跡第4次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度：73-78、大分市教育委員会
- 河野史郎 2002『大友府内4～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～』
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997『小倉城跡2（第3分冊 遺物編）』
- 金武正紀 1991「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』no.11：81-99

- 熊本県天草市教育委員会 2009『棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡』天草市文化財調査報告書第2集
- 熊本県立美術館 1980『中国陶磁の美』
- 熊本大学文学部考古学研究室 1994「諏訪之瀬島切石遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集
- 大分市教育委員会
- 重久淳一 2004「鹿児島県内から出土したタイ、ベトナム陶磁」『陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』1-14.
- 杉崎重臣 1997「中世大友城下町第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.12 2000年度』大分市教育委員会
- 杉崎重臣 1998「中世大友城下町跡第3次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.9 1997年度』:112-118、大分市教育委員会
- 田上勇一郎 2009「戦国期博多の貿易陶磁」関西近世考古研究会第21回研究大会
- 谷晃 2001『茶会記の研究』淡交社。
- 坪根伸也 2003「東南アジア産陶磁器と豊後府内」『豊後府内 南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁～』大分市歴史資料館
- 坪根伸也 2006「大友府内の茶の湯論——豊後国大友府内における出土茶道具からみた茶の湯の様相——」『関西近世考古学研究14——考古学から見た安土・桃山の茶の湯文化』（関西近世考古学研究会）
- 徳永貞紹 1998「肥前神崎荘、松浦荘域の中世港湾と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』no.18:33-44
- 長崎県美津島町文化財保護協会2001『水崎（仮宿）遺跡』長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 美津島町文化財保護協会調査報告書 第1集
- 長崎県美津島町教育委員会 1999『水崎遺跡 美津島町文化財調査報告書 第8集』
- 長崎県瑞穂町教育委員会 1998『陣の内遺跡 瑞穂町文化財調査報告書 第3集』
- 長崎市教育委員会 1997『築町遺跡——築町別館跡開発に伴う埋蔵文化財ハック調査報告書——』
- 長崎市教育委員会 1992『長崎家庭裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告』
- 長崎市教育委員会 1999『興善町遺跡——東邦生命保険第2長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書——』
- 長崎市教育委員会 2002『磨屋町遺跡——長崎市立諏訪小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎県教育委員会 2002『長崎県埋蔵文化財調査年報9 [平成12年度調査分] 長崎県文化財調査報告書 第164集』
- 長崎市教育委員会 2003『唐人屋敷跡——天后堂前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎市教育委員会 2005『炉柏町遺跡——長崎歴史文化博物館建設に係わる道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎市教育委員会 2006『興善町遺跡——長崎消防局——中央消防署新築に伴う埋蔵文化財発掘報告書』
- 長崎市教育委員会 2007『興善町遺跡——市立図書館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市教育委員会 2009『万才町遺跡——長崎地方裁判所庁舎増築に伴う埋蔵文化財発掘報告書』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1992『朝日新聞社長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1993『栄町遺跡——ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996『新地唐人荷蔵跡——「ホテルJALシティー長崎」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996『万才町遺跡——朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書——』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1998『桜町遺跡——オフィスビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2001『五島町遺跡』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2002『金屋町遺跡——オフィスメーション（株）ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2003『万才町遺跡——寺院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2007『金屋町遺跡——長崎市金屋町6番4号におけるマンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2008『桜町遺跡——長崎市桜町8番24号における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』
- 中島楽章 2009「16世紀末の九州——東南アジア貿易——加藤清正のルソン貿易をめぐる」『史学雑誌』第118編第8号:

1-37

- 中野光将 2010「近世遺跡出土のベトナム中部産焼締陶の様相——焼締長胴瓶と壺を中心にして——」『立正考古』第47号：23-35、立正大学考古学研究会
- 中村和美 1998「鹿児島県坊津と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』no.18：58-64
- 西野範子 2004「17世紀バッチャン社に嫁いだ日本人女性について」『東南アジア埋蔵文化財通信 第7-8号』。
- 西野範子 2011a「日本の伝世ベトナム茶陶 ～施釉陶器の分類、年代観とその歴史的背景～」『周縁の文化交渉学シリーズ① 東アジアの茶飲文化と茶業』関西大学文化交渉学研究拠点：163-200
- 西野範子 2011b『考古学と民族学研究からみたベトナム陶磁史——李朝から現代まで——』金沢大学提出博士論文。
- 西村昌也・西野範子 2005「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年——10世紀以降の施釉碗皿を中心に——」『上智アジア学』23号、81-122。
- 根津美術館 1993『南蛮・島物——南海請来の茶陶——』
- 橋口亘 1998「鹿児島県坊津町泊海海岸最終の陶磁器」『貿易陶磁研究』no.18：65-69
- 橋口亘 2006「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相——鹿児島県地域の近世陶磁流通——」『南日本文化財研究所』、『南日本文化財研究』刊行会、4-16
- 橋口亘 2006「補遺：鹿児島県地域における16世紀から19世紀の陶磁器の出土様相」『鹿児島地域史研究』No.3：38
- 松浦章 2007「明清時代中国の海上貿易と陶磁器の流通」『貿易陶磁研究』no.27：4-14
- 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館 2008『海上の道と陶磁器』日本財団助成事業
- 宮崎貴夫 1998「長崎地域の貿易陶磁の様相」『貿易陶磁研究』no.18：45-57
- 桃木至朗 1999「周辺明清時代史——ベトナム経済史の場合」『明清時代史の基本問題』：607-634、汲古書院
- 中島楽章・桃木至朗2008「「交易時代」の東・東南アジア」『海域アジア史研究入門』桃木至朗編、岩波書店、2008）90-97頁。
- 森本朝子 1993「ベトナム貿易陶磁—日本出土のベトナム陶磁を中心に—」『上智アジア学 第11号』：47-73
- 森本朝子 2000「日本出土の東南アジア産陶器の様相」『貿易陶磁研究 no.20』：123-133
- 森本朝子2002「岩崎・対馬出土のベトナム陶磁について」『国立歴史民俗博物館研究報告第94集 陶磁器が語るアジアと日本』：145-156。
- 森本朝子 2004「博多出土の東南アジア陶磁器について」『陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』1-14。
- 横田賢治郎 1991「大宰府出土のベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』11号：101-110
- 吉田寛 2003「中世大友府内跡出土の産地不明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』no.23：50-57
- 吉田寛 2004「大友・府内から出土した東南アジア陶磁器」『陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』31-46
- 吉田泰子・阿部百合子（2010）「日本出土ベトナム陶磁の概要」菊池誠一・阿部百合子編『海の道と考古学 インドシナ半島から日本へ』：194-202
- 山下英明・川口洋平 1997『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡、安国寺前B遺跡』

